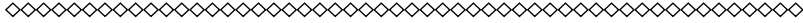


今崎暁巳さんと 私

今崎暁巳さんを偲ぶ会 編

下町人間の会 発行



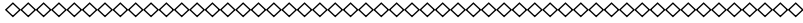
- 今崎さんとの不思議な出会い ● 生熊茂実 32
回し読みをして読んだ本 ● 石井啓一郎 32
今崎さんを偲んで ● 石井次雄 33
今でもありがとう ● 板垣道明 33
人間讃歌の作品群 ● 市原千春 34
今崎さんのようなルポが書ける記者になりたい ● 伊藤千尋 35
今崎さんとの出会い ● 伊藤縫子 36
一枚の風呂敷 ● 今田克彦 36
やさしさと鋭さの交錯するまなざしを
ありがとう ● 今野強 和子 37
お誘いいただき、痛み入りました ● 岩崎京子 38
「生ある限り書き続ける」との意欲 ● 岩垂 弘 39
まだまだ教えてほしかった ● 岩手山武 40
現代ルポルタージュ研究会の生みの親 ● 上田裕子（牧泉） 40
早稲田は生涯の原点 ● 梅田欽治 41
いのちと愛と・人間のたたかいの書『いのちの讃歌』
（重度身体障がい者の出産の記録） ● 江森けさ子 41
人間連帯の運動として ● 及川和男 42





- 3つの顔を知るのは私だけ? ●加茂和子 51
 人間の尊厳で、愛をもって描いた人 ●川村元延 51
 生協の活動から ●菊池陽子 52
 一つひとつは小さな環が次々とつながり ●岸井雄作 53
 半世紀以上も前の出会い ●北村 実 54
 かれこれ44年も前…… ●杵渕智子 54
 「白哲^{はくせき}の貴公子」のような今崎さん ●木村康子 55
 教育者としての今崎暁巳先生 ●木村正明 55
 本作りの出発点 ●久保則之 56
 心に秘めた文学への熱情 ●工藤 威 57
 平和をなによりも愛した今崎さん ●熊谷金道 57
 先生は何を思うか ●倉沢知裕 58
 いつまでも「若者はいま、歩みはじめる」 ●黒澤幸江 58
 今崎暁巳さんを偲んで: ●小生 富夫 59
 『日本ファイル』そして「ぞう列車」へ ●河野英雄 59
 いつも現場で語りあえた人 ●小林雅之 60
 今崎先生と私 ●小松みゆき 61





偲ぶことば ●高井統嗣 70

福島原発・九条改憲へのつながり ●高岡岑郷 70

誠実な人柄に感動 ●高田昭治 71

善意にかけた人生 ●高橋晴雄 71

今崎さん、ありがとうございます ●高橋米吉 72

人生80年代からいえば： ●竹中博美 73

木谷さんを励ます革新オール

早稲田の会で尽力 ●田中幹夫 73

生活協同の試みへの熱い視線 ●田辺準也 74

生きることへの賛歌 ●近津経史 75

ヒューマニズムを基底にすえて ●寺久保光良 76

最後のメッセージ ●富田憲二 76

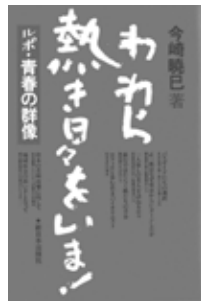
『師』 ●富岡 豊 77

生命のルネッサンス ●豊田 誠 77

今崎暁巳先生の安らかなご永眠を

お祈りします ●鳥生忠佑 79

《な行》



子育て文化協同の運動で一緒に●野々垣務 90
映画人の墓碑に合葬●野原嘉一郎 91

《は行》

御著書『吼えろ青春』を通して●橋本 勇 91
弱きものにもいつも勇気を与えてくれた人●波多野章 92
ご苦労さまでした●浜口武人 92

革新オール島根の会で出逢って●原 徹 93
感動した『いのちの証言』●原美佐男 93

「ガンバレ日フィル」出版記念会でのこと●日野三郎 94
前向きの人●比留間柏子 95

心からご冥福を●藤井 都 95
穏やかな中に情熱がこもった作品●藤田越子 96

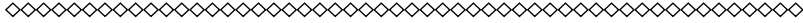
『灯の会』の中でお会いできた●藤村記一郎 96
群馬の勤評闘争の実態調査時から

ルポルタージュの才が●古屋孝夫 97

《ま行》

ルポルタージュの先駆者●松井繁明 97





- 良心を守るたたかいを伝えてくれた人 ● 山口克巳 108
一生の仕事となった学生時代の約束 ● 山口義夫 109
次世代へのバトンを創るいとなみ ● 山科三郎 110
ありがとうやさしい兄貴！ ● 山田晃一 111
真正面から肯定されたこと ● 山田多恵子 112
今崎暁巳さんと日本フィルと私 ● 山本武司 113
松江の美少年 ● 山本元恵 114
点から線へ、そして面へ ● 湯沢満男 倫 114
丸紅との人権問題での出会い ● 吉田昂弘 115
いつも感動を与える人でした ● 吉田博徳 116
今も生きる『ドキュメント日本航空』 ● 若月司郎 117
サンキュー今崎さん、そしてグッドラック！ ● 岡田 尚 118
□今崎暁巳さんの雑誌・パンフレット掲載のルポ・評論・エッセイ 127
□今崎暁巳さんの主な単行本・映画・テレビの脚本 130

なぜ、こんなことを書くかというワケを一言。彼が文学だけでなく労働法を専攻したことと今崎ルポの方法論とか、ルポを構成していく事実・現象を捉えていく視点、実際に起きた事件・現象の正体や問題点の把握、双方の正当性・口実を論じる形での記録づくりの手法を駆使する今崎作品の方法などに深い関係があると思うからだ。

野村ゼミは『旬刊・労働法律旬報』別冊に毎号数本掲載される「労働判例」がテキスト。そこには、私たちが、まだその実際を経験したことのない、労働組合や労働者の権利の実際・運動・法的问题点が満載されている。また目が覚めてしまっばかりの「人間らしく生き、働く権利」が凝縮・集約された条約や国際労働運動の成果・判例も読み学習していく。国際常識の権利の到達点と日本の労使関係、権利のすさまじいズレなどがみごとにわかったりする。

沼田先生の最初の授業の時のこと。「君たちは自治会活動や平和運動などの学生運動に経験があるのだと思うし、労働法のゼミを選択してくれたが、このゼミは戦前の旧憲法時代には無かったのだ。戦前がなぜ、どんな体制・土台かを説明する文献一覧を書くから読んでくるように……これらの文献は、新憲法体制であったからこそ存在したゼミの意味をとらえるためにも不可欠だ……」と宿題を提起。大きな黒板いっぱいを吹き上げていく後姿に身がしまる想いがした。今思うと、他学部から来た今崎君歓迎のメッセージもこめられた授業だったのかと思ったりする。

こうして今崎作品のメインテーマ「人間らしく生き働く」典型的な権利やその事例な

どの国際労働運動の成果や条約も学び、身につけていくなかで、作家として自信をもって現場取材をする前提・視点がつくられていったのだと思うのだ。

◇、自由がある家庭での育ち——今崎ルポの土台のひとつ

今崎ルポのもう一つの要素に、夫妻の家族・家庭の要素があると思えてならない。

鱈坂真・上田浩・宮田哲夫・村瀬裕也編著『日本における唯物論の開拓者——永田廣志の生涯と業績』（2008年8月30日、学習の友社）の永田先生の一人娘が今崎夫人の則子さん。本書に「父・永田廣志の思い出」で「治安維持法下で」、「戦中の暮らし」などを書いてある。今崎君は、企画や原稿の良し悪しを夫人に語り判断してきた癖がある。私に企画を持ち込むときに「則子が企画も原稿もいいといってるからな」と及第点を受けていることを根拠にして、私に原稿を読むことを頼むのがしばしばだった。

今崎君のおかあさんの静枝さんは作品集も出している作家。日本の第2回メーデーに初めて5人の女性が参加したときの一人だと、彼は誇らしげによく語っていた。

お父さんの義則さんは日本の金鉱山での珪肺症の研究・開拓をしていった医師で、金鉱山の労働者の集団検診のシステムをつくり取り組んでいった方。この山陰の民医連・出雲市民病院の院長だった父上が、1960年3月に過疎化日本一の鳥根県の三瓶町志学に「三瓶診療所」を設立し地域医療にとりくんで来たが、高齢と病気がちの父上の後継を決意した長男の正生先生が、長年の高校教師を退職し、39歳で東邦医科大学を受

◇ 駿して合格、夫人・子どもの3人で上京して医学部を卒業した正生先生が診療所を引き継いでいき、今日になっている。今崎君が、日本の近代のなかで、デモクラシーや個の権利など、両家とも、自由があつた家だつたんだよな……と語っていた。

正生先生が県の教員組合で役員をされているときに、さまざまな指導をうけながら今崎家に長期に滞在させて貰って、勤評闘争の実態・意識調査をさせていただいた。後に群馬県の都市でも、大学院の民法専攻で今は「9条の会」などで一緒の、今崎君の長年の友人の古屋孝夫君も参加して、群馬の私の家に3人で合宿して調査に取り組んでいた。

勤評闘争が最後までもりあがつていた闘争の共闘団体、群馬民擁連の金子満広副代表に、意識調査の対象分会を紹介していただいて調査ができたのだが、これが「上野の森に『広島・長崎の火』を永遠に灯す会」や今崎作品『人生つねに始発駅 人間金子満広』の元衆議院議員の金子先生との最初の出会いでなかったかと思っている。

◇ すべての作品を貫く人間讃歌——共生の社会・人間関係を紡ぎだすルポ『競争と共生』……内橋克人さんの提起。

「競争の原理は分断です。分断して対立させ、競争させる。……共生は連帯と参加と協同を原理として食料、エネルギー、介護など人間の基本的な生存権を大事にする。FとEとCを自給し、消費するだけでなくそこに雇用をつくり出す。その価値観の下で新

たな基幹産業を創出し持続可能な社会に変える」——市場万能、競争至上の新自由主義経済に異議を唱え、「企業破壊、社会の絆が断たれる」と警告する内橋論（『朝日新聞』OPINION 資本主義社会はどこへ。2009年2月23日）。

この指摘の時に今崎君が以前、著書で書いていたことを思い起こす。「高橋ちば市民生協理事長が『どぶ川学級』の著者・須長茂夫さんの「子育て、人づくり」の一緒に育ち発達するという思想から、人と人をつなぎ、結ぶ、「ごいっしょに」という、生活協同の新しい理念、用語ををひきだした事実、大変示唆にとんでいます。すなわち、人間の成長そのもの、人間そのものを、生活協同の運動、事業のまん中にすえたということです……」（『生活 ごいっしょに』エピソード。1990年3月15日刊。今崎著）。

指摘されるように、極限にまで組み立てられた分断・競争社会にストッブをかけ、協同して生きる活動・社会づくりの活動のまっただなかに飛び込んで、今崎君自身が生協の配達車にも乗ったりして、生活の、女性の、子育ての、教育の、平和のとりくみの現場のただなかにとびこんでいてとりくむなかで、本書や作品群が創られていったのだと思う。

◇人間ドラマ・人間関係ルポ

1962年10月から4年間、大好評だったテレビ「判決」でシナリオ作家の一員として参加したのが彼のデビュー。しかし番組への政府・自民党などをはじめとした「偏

向番組だ」の干渉が繰り返されて、1966年8月10日の番組を最後に放送は中止となった。その後、『コブだらけの勝利』（1969年刊）でルポの最初の単行本を出版、以後35点の単行本（共著も含む）と70点以上のエッセーという業績を残して、昨年（2010年）12月に旅立っていった。

いま、「無縁社会」とか「絶縁社会」とかが語られる。これは人間の絆・共生にかえて、お互いが人間の尊厳で結ばれ響き合って絆を結ぶのではなく、友人もふくめて、他者を競争の相手としてのみにしてつくられていく企業社会・人間関係がうみ落とした産物だ。これに対して今崎作品が貫くものはまったくちがって、家庭も地域も、仕事のなかでも描かれる人間讃歌。すべての作品で、「一緒に人生を創っていこう……」と呼びかけ、出合いを創り、絆を結び、共生が創りあげていく人間社会・人間関係が生みだすすばらしい営みを描く作品群だ。

激動・激変をしていく時代・社会で生じる人間疎外への人間回復の取り組みのルポ群であったり、日フィルなど文化、マスメディアからの作品、官公労中心から民間、とりわけ日本の企業社会に最大の特徴である極少数の大企業のもとに何階層も重ねられたピラミッド型中小企業群社会、町工場、地域でのたたかいのなかで生まれてくる、人間らしい労働の回復、人生づくりの現場からのルポ群であった。

傷ついたモデルや不当な人間扱いを受けた労働者たちが、作家・作品との出会いをとおして、自分や友人たちの素晴らしさを発見し、希望・夢をもって歩み出す人間ドラマ・

ルポ群だ。

◇取材魔の方法

作品づくりに関係することだが、彼の感性にひっかかったり、気がかりな情報に出会った場合、私を企画に巻き込むための説得にくる。「魅力があるんだな……この人物……」。彼独特の感覚で捉えた、相手の人間丸ごとの魅力を懸命に言い張り、おしてくる。そして企画書をまたもとほけている。

「それでどうした……。」。いつものように、なぜ、なにを描き、読者に届けたいんだと追求すると、取材魔の彼が録音した日フィル団員の200時間のテープをあんたが聞いてほしい人物を決め、その取材をしながら決めようよ……とか、長崎造船の430人の取材とか……にまきこまれていく。

彼の目をつけた人物の家庭にもおしかけて取材していく仕掛け・ワナをかけてくることになるのだが、日フィル企画では、山本武司宅にまず連れて行かれた。家に入ると、天井の3カ所くらいにあるすごいスピーカーから音楽が流れ続ける。何回訪ねても同じだ。いわば、お客さんがきているのになくと思い、「いつもそうなんですか」と聞く……。「これは私の空気ですから、子どもたちにとつてもね……。」という。父上もオーケストラの有名な演奏者とか。しゃくだけけれど、帰りには「日フィル企画をしないようなら人間じゃねー」とゴーサインをだしてしまう。

そんな場面にとまどったり、楽員のよくれた小さな下宿にいくと、天井からバイオリンが紐でつるしてある。「天井につるして置くんですか」と聞くと、「置くところがないからね……」という。そして「あれ、いくらぐらいだと思えますか」とからかうようにいう。「いまなら4億円くらいはしますよ……」。3度の食事も満足にできないような状態の争議団の家にある宝物に驚くばかりだった。

◇作品の思い出……別掲の作品群の案内板

1 『日フィル』と、ともにあゆみながら。

今崎君の凄いところは、解散・解雇にさらされたオーケストラが、これまでの殿堂で「音楽を聴かせてやる」からぬけだして、市民とともに創りあげていく12年にわたる新しい音楽運動のなかで再建していくとりくみを、文字通り、全国を共に歩きながら……、『友よ！未来をうたえ』（正・続）、『新世界へ——日本フィルの旅立ち』3冊で刊行。映画化もされ、世界に発信されていく。

そのときに今崎君の位置は、著者というよりは、日フィルと市民が生み出した新しい音楽運動の担い手そのものの一人として、全国に展開されていく各地の市民のコンサートづくりのとりくみにも率先して参加しながら、描いていく現場ルポということだ。

彼の作品の特徴は、このように、取材というよりは「俺たちは人間だ。人間扱いをせよ……」とたたかう一人ひとりの争議団員とともに生き、あるいは日本フィルの活動の



『いのちの証言』出版記念の集いが、2006年11月10日（金）に開かれ、その集い開会前の打ち合わせ。右から木村康子さん、今崎さん、山本眞一弁護士、柳沢明朗さん、渡辺治さん、山科三郎さん。

ど真ん中に参加しつつルポしていくことではないかと思う。こうして音楽家・音楽が描き出す人間讃歌・人間変革に感動の連続の作品がうまれてくるのだ。

2 『ドキュメント日本航空―国民の翼をめざして』・単行本。また、これに関連した取材、企画などを描いた『日航機事故の深部と労使問題―「ドキュメント日本航空」を書き終えて』（「賃金と社会保障」特集Ⅱ「労務管理のあり方と事故など見事な記事・1983年」）、日航問題の単行本と雑誌評論、日航機事故の深部と労使問題など、今日の日本航空問題をも解明する作品群などいろいろのあり。

3 東京争議団関係。技術革新が人間疎外に直結する労働の質も形も激変のなかでの人間らしく働く状態のルポ群。重厚・長大から軽薄・短小、IT時代への出発のなかで、日本フィロや沖電気をはじめ争議団の「人間疎外の回復」「人間らしい労働を」を求めてたたかうルポ―沖電気『なにをみつめて翔ぶのか―沖電気

指名解雇をこえて』、報知新聞・印刷のたたかいの連作各種がある。ここでは戦後の企業社会の変動・労働現場の変質・変化のもとでの人間が見事に描かれている作品群。

4 生協と一緒に3年連続したイタリア訪問など国際的な連携活動を通して、文化で、くらしのなかで——日本よりGNPのはるかに低い国の見事な豊かなくらしの事実にふれ、「豊かさとはなにか」「文化とは」などを根底から問いかけ提起していく作品群。共生・協同の典型的先進国の事実をルポし続けている。

5 日本の生協もまた、すさまじいまでの発展、なぜか。くらしのなかで、地域のなかで、子育て・教育・平和の問題で絆結んで、「競争をこえた共生・協同」にとりくむ、各地の生協を中心に進められた単行本と評論。本も評論もすぐれたものが多数あり。

6 『いのちの讃歌』……2歳の時の脳性小児麻痺が原因で、左足指しか動かない重度身障者の木村浩子さんが、座敷牢にとじこめられて育つなかで文字を憶え、短歌をつくり、足指で絵を描きつづけてきた彼女が、軽いがやはり障がいを持つご主人と結婚されて出産となってきたときの物語。障がい者の見方、発達論など人間の発達観論をリードし、問いかけていく絶好の題材・問題提起の書でもあった。

「こんな重度身障者の出産は世界に例がない」……と出産がせまるなかで病院から受

け入れられなかったときに、民医連・医療生協の福島病院が受け入れてくれて無事出産し、子育てに取り組むルポ。

担当の江森看護師からの連絡で今崎君ととんだ。その江森さんに今崎君の偲ぶ会の連絡をしたときに、「私は今崎先生が人間というものを捉えるときの人生の師でした。人間として、医療の仕事にいる私が患者と向き合うときの姿勢、かわり方を浩子さんに向き合う今崎先生の姿から本当に学びました」と語ってくれた。

足指でようかんを切り、皿をふき、楊子をそえて、皿を押ししてくる浩子さんの歓待に、今崎君はまことになにもなかったように羊羹を食べていった。私はどうしても手が出なかった。浩子さんが大笑い。「社長さんは正直だね。いいんだよ……」といって、みんなで大笑いした。ひっくり返るほど恥じた。

作品とこの事實は、世界に先駆けて先進的に取り組まれていた日本の障がい者の発達論——人間論の根底ともいえるところから、テレビ局はもとより各関係者・専門家集団がいつせいに研究会などをして、取り上げてくれた。

7 『明けない夜はない』の映画化……村山ひでさんの3冊シリーズの最初の出版。何人かの監督や作家の先生方から映画化の話がきたが、山形県教組が教組の企画で映画化を大会決定してくれた。山本薩夫監督・伊藤プロデューサーのゴールデンコンビで話が進む。シナリオを依頼された飲めない今崎君も、毎度参加してしゃべったり、山形県

に取材したりして深めていった、実に楽しい時間をすごした。

第1稿があたり提出されたとき山本監督のOKがでない。結局、書いては直して7回書きなおしたときに、山本監督が他の映画をつくることになり映画化の夢は消えた。今崎シナリオの他に4本、計11本のシナリオがシナリオ作家から寄せられたが、監督のOKがでなかった。かなり激しく論議を重ねてはきたが、夫の逮捕投獄や結核で咯血したり、河原に建てた掘建て小屋で「水あがった」と泣く子どもと泣くひでさんが、なぜあんなに明るいのか、生まれつき、童女の様な……ではなくて、立体的に、映像で……というのが要求だった。

戦前の治安維持法体制や軍事大国のひどさも、怖さもくぐった監督たちの指摘はわかりつつも、ひでさんの明るさと暗さの葛藤・変革が映像化できない苦闘のなかで、映画化の夢は消えた。才能と個性あふれる作家たち、表現者のすさまじいまでの葛藤をみた。

8 モデルのみなさんの人物伝・人生伝

『人生つねに始発駅 人間金子満広』（1990年）

『人生いつも素人―弁護士 尾崎陸の挑戦』（1992年）

『北の砦―ルポルタージュ 鳥生忠佑と北法律事務所』（2009年）

も応募した。最終試験に残ったのは52人、彼も私も含まれていた。最終試験の形式は、「グループ・ディスカッション」。「恋愛結婚か見合い結婚か」というテーマが出され、どちらかを選ぶ。テーマの提示を受けて30分後に討論が開始となる。

「このテーマでは全員が恋愛結婚を選ぶに違いない、となると討論は成立しなくなる。俺たち、見合いを選ぶのか」と提案すると今崎君もすぐ乗ってきた。しかし見合い結婚を選んだのは、私と彼の二人きりだった。他の50人から責め立てられ二人はタジタジー。受験者と番組プロデューサーとを取り違えた私と今崎君の二人だけが不合格となった。しかしTBSに合格していれば、ドキュメンタリー作家今崎暁巳の誕生はなかったかもしれない。

(早大仏文科同窓生)

今崎先生と「現代ルポルタージュ研究会」 ● 浅利 正

1978年秋、中央労働学院の「ルポルタージュ教室」に学んだ。その時の主任講師が今崎暁巳先生だった。その年の11月、私が勤める沖電気が大量の指名解雇を強行した。今崎教室の受講生で沖電気争議団の事務所を訪問取材し、教室終了後も勉強を続けようとして「現代ルポルタージュ研究会」を設立。機関誌創刊号で「特集沖電気争議」を組み、争議団の全国オルグ・「赤旗まつり」などで1000冊以上を普及した。

で、あきらめないうで生きて一人の人生の側面を描いていただきました。この時は手術後4〜5年であり、奥さん共々、元気に取材できたことを嬉しく思い出します。

その後、ある人のドキュメントも検討しましたが、実現できませんでした。人間の生き様を丁寧を描いていただき、今崎さんの人柄が偲ばれます。ありがとうございました。

(知人)

生協と文化協同での出会い ● 新井千明

今崎さんとは、おそらく生協の講演会か文化協同の集まりの場でお会いしたことで親しくお話しする機会が生まれたのだと思います。

今崎さんは埼玉県北地での生協活動や文化活動にも関心をもたれ私たちの活動を評価し良く励ましていただきました。また、時々電話をいただき、映画作りの構想を述べられ「脚本を送るから」と意見を求められたこともたびたびありました。今崎さんの映画製作への情熱と思い、社会問題に対する真摯な目と姿勢には学ぶことが多くありました。

それから深谷の民主保育園の指導者が同郷ということもあって、深谷にもお出でになりました。また、美里であったかと思うのですが、そこで行われたコンサートに元衆議院議員の金子満広さんとお出でになったこともありました。

せられたメッセージの温もりは、一緒に歩んだ仲間の証。そう受け止めている。

(川口ぞうれっしや合唱団)

音楽の良き理解者、今崎先生 ●安藤由布樹

今崎先生の著書『友よ！未来をうたえー日本フィルハーモニー物語』（労働旬報社、1975年）は、私たち音楽の世界に生きている者にとりまして、自分たちのために書かれているような本でした。

最後にお目にかかったのも、日本フィルハーモニーの弦楽四重奏団と協演した演奏会でした。これからは私たちにおまかせください。
(作曲家・指揮者)

職人的編集者のきつかけをつくっていただいた ●飯島信吾

私には、若い時に出会っていなかったら、「職人的編集者」（エディター）にはなれなかっただろうと思える人がいる。木檜哲夫さん（労働旬報社代表・当時）、川崎忠文さん（同編集部・当時）、柳沢明朗さん（後の労働旬報社社長）、中林賢二郎先生（法政大学）、そして今崎暁巳さんです。

今崎さんとの不思議な出会い ● 生熊茂実

今崎さんの訃報を聞き、残念です。1977年、私たちがたたかっていた全金渡辺製鋼の破産闘争、破産から強制和議で会社を生き返らせる、そんな珍しい成果をかちとたたかいたなかの若者の群像、そのひとりとして取材をうけたのがきっかけです。それは『学習の友』（1978年1〜3月号）に掲載され、その後、ルポ集『新たな連帯を求めて』（学習の友社）に収載されました。

もともと、それ以前から、労働旬報社から発行されていた今崎さんの労働者のルポルタージュの愛読者でしたから、それ以降も、おつきあいをいただいています。

今崎さんが出版すると、必ず贈呈をいただき、私も共著の出版をすると、必ずお贈りしていたものでした。奇遇だったのは、今崎さんが、かつて働いていた職場が、現在のJMIUリガク支部の職場だったことです。不思議なところでつながっていました。ご冥福を祈ります。

（JMIU中央執行委員長）

回し読みをして読んだ本 ● 石井啓一郎

35年前、ミュンヘン留学中、映画「炎の第五楽章」の原本、『友よ！未来をうたえ』

を在住の日本人仲間と回し読みをして語りあったことを、懐かしんでいます。

(日本フィルハーモニー交響楽団)

今崎さんを偲んで ● 石井次雄

旬報社60周年記念企画の「旬報社デジタルライブラリー」がホームページに掲載されており、今崎さんの『三菱帝国の神話』（1977年刊）が収録されています。^{*}

1970年代、日本最大の企業グループ三菱の拠点であった三菱重工長崎造船所で行われた少数組合に対する差別と支配の思想と実態を告発した迫真のルポルタージュです。この本に代表されるように今崎さんは多くのルポルタージュを書かれましたが、私はこの本が一番好きです。「旬報社デジタルライブラリー」は無料公開されていますので、是非、一読をお勧めします。

そして21世紀のいま、原発を手にした人類は未曾有の危機に直面しています。今崎さんだったらこれにどう立ち向かわれたであろうか、と想う。(前労働旬報社社長)

今でもありがとう ● 板垣道明

私は石見の益田（鎌手）出身です。東京都港区の沖電気で働いていて、1978年、

^{*}http://www.junposha.com/library/?_page=book_contents&sys_id=56

妻のてつ子を含む78名が不当にも指名解雇され（私は切られなかったんですが）、裁判闘争をたたかいました。

今崎さんは、仲間のたたかいを『なにをみつめて翔ぶのか―沖電気指名解雇をこえて』（労働旬報社、1980年）というルポにまとめ、大きく支援してくれました。

その後、勝利・和解して、職場復帰を実現する大きな力になったのです。今でも本当にありがとうございます。感謝、感謝です。

（元沖電気）

人間讃歌の作品群 ● 市原千春

今崎先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

未曾有の大震災にみまわれた今日こそ、逆境下に生きる人びとに対し温かなまなざしをもって人間讃歌を謳いあげた先生の作品群が、必要とされていると思います。

その意味で先生のご逝去は悔やまれてなりません。重ねて哀悼の意を表しますとともに、先生との知己に感謝の気持ちをごこめて、ありがとうございます。

（『この人生に愛なくば―いのちと自立のうた』（労働旬報社、1981年）、スモン患者）

今崎さんのようなルポが書ける記者になりたい ●伊藤千尋

学生時代から今崎晁巳さんの本を読ませていただき、新聞記者になると「今崎さんのようなルポが書ける記者になりたい」と思いました。駆け出しの記者だった朝日新聞の長崎支局時代に、日フィルの取材のため長崎に来られた今崎さんにお会いしました。そのときに朝日新聞に書いた記事が、『続・友よ！未来をうたえ』で紹介されました。マスコミが「中立」の名のもとにくだらないニュースを垂れ流すことが多い今、弱者の視点に立ち、社会正義の実現を目指して果敢に書いてこられた今崎さんの仕事が、いつそう光って見えます。

あれだけ多くの作品を出される過程で、いったい何人の人に取材されたのか、そして何人の人生に影響を与えられたのか。今崎さんはご自分も輝きつつ、周りの人々にも生きることの意味を改めて認識させてくれたと思います。

長崎でお会いしたのは、もう35年も前です。でも、あなたの笑顔、気さくな人柄は今でも生き生きと思ひ出します。合掌。

(朝日新聞)

今崎さんとの出会い ●伊藤縫子

今崎さんとの出会いは、学生時代のグループ登山で北アルプスでした。楽しい想いで、女子は男子たちにあだ名をつけました。彼は「坊や」でした。当時、私はノンポリでしたが、社会に出てからは労働運動にかかわり、労働者代表として、党の主催の宴会に招待され、偶然にも指定席が彼の隣でした。その時はじめてお互いの身上を確認した次第です。しかしその後、おたがい多忙で、彼の多くの作品はその都度読ませていただきましたが、お話しする機会はありませんでした。

上野の6・9行動で最後にお会いしたときは、体調をくずしておられたようで気になっていました。お話ししたいことがいっぱいあったのに残念ではありません。心からお悼み申し上げます。

(東京原水協常任理事)

一枚の風呂敷 ●今田克彦

突然の便りにびっくりしました。新聞で訃報をよみました。本当に惜しい人がまた一人逝かれたと寂しい思いをしていました。

今崎さんとは今から30年ほど前、日本共産党島根県人会の席上でご一緒したことが記憶にのこっています。その頃のことですが、第22回赤旗まつりに島根県共産党後援会の上京を歓迎し、風呂敷が作製され、今崎さんの名前も刻まれている一枚を今でも保存しています。私が島根県から上京する以前に『友よ！未来をうたえ』を読んでも感動しました。その感動がさめない時期に今崎さんにお会いし、温厚で誰にでも分け隔てなく話される姿に改めて感動したものです。その時、ルポに愛情がこもっている訳が理解できたのを思い出します。今崎さんのご冥福を心よりお祈りし、感謝申しあげます。

(県人会―オール島根の会)

やさしさと鋭さの交錯するまなざしを

ありがとう●今野強 和子

今崎暁巳さんは、松本克巳と私たちで長く続けている《愛とヒューマンのコンサート》活動をずっと見守ってくださった。病身を押しして近郊でのコンサートには駆けつけられた。またその主催者にも丹念に取材をされていた。埼玉県坂戸市の我が家にも何度足を運ばれたかわからない。ペンを片手に小さな愛用の録音機をそばにして、やさしさと鋭さが交錯するまなざしはいつも輝いていた。

私の家は40年前に、奥武蔵東秩父連峰の山裾にある、木工の町越生の大工さんに建て

ていただいた。職人の思い入れと技が込められた家で、今度の地震でも揺れに揺れたが細長いワインの空き瓶が2、3本横になっただけ、手を合わせて大工さんに感謝した。

偶然であるが今崎暁巳さんが数年前に越生出身の木工職人の波瀾万丈の生きざまを『いのちの証言』（2006年、ふきのとう書房）という本にして出版された。私は梅香る越生の町で出版記念コンサートを企画した。ヴァイオリンは今崎さんが目の中に入れても痛くない松本克巳だった。今崎さんがバラを贈られた後にステージでそれを抱いて松本の奏でるアンコール曲に酔いながら笑みを浮かべておられた。たくさんのコンサートを企画してきた中でもことさら思い出深い。

今崎さんは400字原稿用紙に、430枚の遺稿を残された。おそらく絶筆であろうその中には、人権、正義、平和を希求して志半ばにオウム凶刃に倒れた坂本弁護士一家の遺志を音楽で伝える《愛とヒューマンのコンサート》が数多く書かれていた。病とたたかいながら必死に書かれた根柢が痛いほど伝わってくる。いつの日か旧友のみなさんの手によって出版されればと願っている。

（愛とヒューマンのコンサート）

お誘いいただき、痛み入りました●岩崎京子

立春が過ぎましたのに、雪が降ったりで、地球が病んでいるんじゃないかと思えます。

この度、今崎先生の追悼の御催しにお誘いいただき、痛み入りました。ありがとうございます。

実は会の六月四日、大阪の国際児童文学館が、大阪府知事橋下徹氏により閉鎖。中の本、資料など三つに分けて方々の図書館にあげられました。その再生を求めて訴訟中で、六月四日、五日、再生を求める会で講演を頼まれています。

先月は証人喚問で（オシラスで証言もしました）、というわけで、今崎先生の偲ぶ会にはうかがえないのですが、勝手を申し上げて、お許しくださいませ。どうかどうか、会の皆様にもよろしく御芳声くださいませ。

（児童文学作家）

「生ある限り書き続ける」との意欲 ● 岩垂 弘

1950年代に早稲田大学で学生運動に関わった同大学OBが、十数年前から年一回集まって懇親会を開いています。「早稲田50年会」といいます。今崎さんもそのメンバーでしたが、この会に見えられたのは2009年7月に開かれた懇親会が最後でした。長い闘病生活から奇跡的に快復されたとのことで、スピーチの制限時間を超えて「共産党の綱領は今なお正しい」「生命の続く限り書き続けたい」と、低い声で延々と話されたのが印象に残っています。

おびただしい著作を発表されましたが、印象に残るのは『すてきな出会い』（1987

年、旬報社)です。生協活動のルポルタージュですが、そこには、人間同士が協同することの意義が具体例を通じて紹介されています。生協運動に注目した先駆的作品であり、今崎さんの思想が込められた傑作と思います。

(元朝日新聞記者)

まだまだ教えてほしかった●岩手山武

労働運動について、30数年前からいろいろお世話になりました。また下町人間の会の各種イベントにも積極的に参加され、たいへん感謝しています。まだまだたくさんいろんなこと、教えていただきましたかかったのに残念です。

(下町人間の会)

現代ルポルタージュ研究会の生みの親●上田裕子(牧 泉)

現代ルポルタージュ研究会は、1978年に中央労働学院のルポルタージュ教室の卒業生達で作られました。沖電気の指名解雇事件が起こった年です。先生の授業では、その解雇撤回闘争を取材することで始まり、如何に描くかを学び、卒業にあたって会を結成することになりました。

今崎先生は、この会の生みの親であり、また育ての親でもありました。研究会の30年

の歩みのなかで、働きながらポルターージュを書くことの意味を深く考えさせ、私たちを鍛えてくださいました。心から、ありがとを申し上げます。

(現代ルポルターージュ研究会会員)

早稲田は生涯の原点 ● 梅田欽治

今崎君は1948年に早稲田で出会って以来の友人。

その後、ゆっくり話し合う機会は多くはなかったが、会えばすべてが判りあえ、早稲田は生涯の原点であったからだろう。

(宇都宮大学名誉教授・早稲田大学学友)

いのちと愛と・人間のたたかいの書

『いのちの讃歌』(重度身体障がい者の出産の記録) ● 江森けさ子

41年前に、本作りに情熱的な柳沢さんと、物静かな今崎さんの対照的なお二人が広島を訪ねられました。重度の障がいをもつ木村浩子さんが人間の尊厳を守り生きぬくために挑戦し続け、自らの命と対峙し出産という大事業を成し遂げたことに関心を示されたのです。そして新たな命の誕生に関わった医療関係者の取り組みに、あるべき医療・看護の姿を見つけ取材が始まりました。

この実践記録を出版する意義を熱く語る柳沢さんに対し、今崎さんはちょっと背を丸めて穏やかな口調でニコニコしながらインタビューをされました。

言葉がうまく出ない浩子さんの聞き取りは、非常に困難が伴いましたが、全身全霊を掛け、耳を傾けてくださいました。物珍しさを追いかけるルポライターとは違い誠実性にあふれていました。今崎さんには何を語っても登場人物の気持ちを代弁してくれるとその時思いましたが、それ以上のものを引き出してくださいました。

完成した『いのちの讃歌』（労働旬報社、1970年12月）は人間の優しさと、生きる勇氣と感動を世の人びとに与えました。素敵な方でした。（看護師）

人間連帯の運動として●及川和男

今崎さんのルポルタージュには、人間へのあたたかな「まなざし」が深く働いていて、文体にもにじみ出ています。人間が連帯していく運動に、ペンをもつてかかわっていくという基本姿勢から、それは生まれているのだと思います。今崎さんのお仕事自体が運動だったと思います。

静かで粘り強い現実への体当たりの仕事ぶりは、今も光り続けています。（作家）

労働法専攻・今崎暁巳 ●大石 進

私が大学に入学した頃、今崎さんは大先輩の活動家だった。ダンディで、さすが仏文科、と眺めたものだ。私が4年間罹患していた怠け病治療のために早稲田大学大学院の野村平爾ゼミに入院したとき、同室の患者に彼を発見し、「なんで場違いな労働法ゼミなどに」と驚いたものだ。2年間、ともに学ぶことになる。

野村先生からのご下命で、「理学電気」なる医療機器の会社への就職を、彼に持ちかけたことがある。就職難の当時、野村先生はゼミ生の行く末に心配ひとしおだったのだ。彼は何人かの野村門下生とともにこの会社の戦略部門に一時、籍を置いた。

彼がシナリオライターを経てドキュメンタリー作家として世に出るまでには、10年ほどの年月があった。作品には、大学院での労働運動の学び、理学電気での摩訶不思議な経験が生かされていること、驚くばかりである。彼の歩んだ道は、無駄ではなかったのだ。

(早稲田大学大学院の野村平爾ゼミ・学友、元日本評論社)

誇りある島根県人 ●大田宣也

今崎さんはすぐれた仕事のかたわら、首都圏の「革新オール島根の会」代表として日

本共産党の躍進に大きく尽力されました。故吉岡吉典さんとともに誇りある島根県人でした。当日・所属団体（日中友好協会）の全国大会のため参加できず残念です。

（革新オール島根の会）

「若者はいま歩みはじめる」、「ぞうれっしやがやってくる」

そして「三瓶」 ● 岡村信秀

故今崎先生と出会ってから四半世紀が経過しました。青年の進路をあらためて考えさせられた『若者はいま歩みはじめる―高校生活への挑戦』（労働旬報社、1978年）、そして「ぞう」との出会い。92年1月、今崎先生の仲介で柳沢さんに会い、「ぞう」の話しを聞いたときは感動でした。そして翌年の夏、ヒロシマで大合唱が実現。つづいて阪神淡路大震災直後の神戸での「ぞう」は今でも思い出します。

それから16年が経過。今度は国内最大の東日本大震災が発生。この夏の8月5日、生協の虹のひろばで再び「ぞう」を唱えます。そのあと三瓶を訪れようと思っています。

（広島県生活協同組合連合会）

「たたかいのルポルタージュ15号」発行と

今崎顧問 ● 小川 緑

現代ルポルタージュ研究会が3年半ぶりに機関誌「たたかいのルポルタージュ15号」を発行しました。ルポ研では、会員がこれから書くこうとする企画段階から集団討議にかけ、レジュメ、第1次原稿、第2次原稿と例会で、皆が侃々諤々意見を出し合いながら、作品を仕上げていきます。

今回もまた、このような例会を開いていきましたが、毎回、この例会に今崎暁巳さんは参加されました。そして、現代という時代の本質をどう見るのか、人間回復のたたかいはどのようなものなのか、例によって鋭い質問を突きつける柳沢明朗顧問の追及を横で力強く相づちを打ちながら、ニコニコ聞いていました。

11月の例会には、あまり体調が良くないなか、どうしても参加するんだという今崎さんのために、奥様が付き添って参加されました。15号を発行させたいという今崎さんの執念のような情熱に胸を打たれました。そして12月15日、思いがけない訃報に接することになったのです。その後、作品をまだ完成させていなかったメンバーも、今崎氏の遺志にこたえようと、作品を仕上げてきました。

今回、どれだけこの今崎さんの思いにこたえられたか自信はありませんが、何とか15号を世に出すことができ、ほっとしています。

人間としての誇りをかけてたたかっているさまざまな現場に向いては、人と人をつなぐルポを書き、たたかいを励まし続けてきた両顧問の思いを私たちは次代に引き継いでいきたいと思います。

(現代ルポルタージュ研究会会員)

平和への熱いおもいに勇気と学びを ●小野寺利孝

「灯す会」活動で、長い間ご一緒したことを忘れません。

とりわけ近年は、不自由な条件の下で最後まで反核・平和の草の根の活動を熱いおもい一杯にして担い続けられる姿に勇気づけられ、学んだ次第です。

（上野の森に「広島・長崎の火」を永遠に灯す会理事長、弁護士）

50年を越す知友 ●鍛冶利秀

早大・野村平爾教授の大学院ゼミからですから、もう50年を越す知友でした。いつも温顔で、聞き上手で、ツボをはずしませんでした。良質なルポルタージュを楽しみにしていました。淋しくなります。

（早大からの友人・弁護士）

一介の読者にすぎませんが ●風祭豊志雄

今崎先生の心よりご冥福を祈ります。

「しんぶん赤旗」紙上にて、かつて掲載されました先生の諸論評などを拝読させてい

いただきました一介の読者にすぎません。偲ぶ会へのお誘いの書状をいただき恐縮しております。不参加のこと何とぞご容赦下さい。 不一 4月3日 (島根県人会)

東京憲法会議で再会 ●片桐公男

私は造船重機産業大手のIHI（石川島播磨）で会社に賃金差別の是正を求めてたかかってきた。30年ほど前のことだった。今崎さんとは、その当時はじめて知り合ったが、その後今崎さんは、沖電気の争議をルポにまとめられた。私より10歳ほど兄貴だったが、もの静かな人との印象を持っていた。

それからかなりの年月が経過して東京憲法会議の総会で再会した。私は助っ人として憲法会議へ来ていた。今崎さんは、東京憲法会議の代表委員として憲法運動の最前線にいたのだった。私たちは、今崎さんの意志を継いで、憲法を守り、生かすたたいを進めていきたいと決意している。(東京憲法会議)

揺るぎのない一生でしたね ●片野純恵

1950年4月、大学に入ったとたん、私たちは前年から続く反イールズ（GHQ民

間情報教育顧問) 闘争の教室での反対集會に巻き込まれました。それから卒業まで、メーデー事件、早大事件、レッドパージ反対集會と、学生闘争に明け暮れ、あげくの果ては、就職難で走り廻りました。

その都度、今崎さんは、あの、昔、隠岐に流されたお公家さんの末裔かと思われるような色白で穏やかな顔で、しかし、しつかりと宙を見すえて控えていました。

今崎さん。覚えていらっしやいますか。六〇年安保闘争でしたか、何処の集會に駆けつけていいか解らず、臨月のお腹を抱えて警視庁の石段にへたり込んでいた私に「おい、おい」と声を掛け、フランス・デモに誘ってくれましたね。

あれから幾星霜、常に変わらず、貴方は困った人、虐げられた人の側に立って発言を続けてこられました。見事な人生でした。

(早稲田大学学友)

「紹介したい人がいるんだけど……」 ● 加藤雅代

今崎先生との出会いは、ちば市民生協(現ちばコープ)の組合員理事をしていた時でした。暮らしの視点から、自分サイズで発信ができる生協運動は、あの頃の専業主婦にとって社会参加の大切な場でした。そんな活動を表した『暮らしのルネッサンスー生活をつくり変える女たち』(労働旬報社、1984年)、『お母さんきれいだね』(日本生協連、

1986年)などを感動いっぱい読んで読んだものです。実際の今崎先生は照れ屋で、話もボンボンと上手ではないけれど、人を惹きつける不思議な魅力ある方でした。

今崎先生の「紹介したい人がいるんだけど……」の言葉とともに生まれたさまざまな人との出会いは、私の行動範囲を広げました。そうれっしや、子育て文化協同……。人と人がつながることの大切さを、そこから広がる可能性を教えて下さった方です。

(ちば市民生協〈現ちばコープ〉)

苦楽をともにした仲でこそ

わかる人生の味、庶民のこころ ●金子満広

私よりも若い今崎さんとお別れすることなど、まったく考えてもいかなかったことです。無念残念。だが悲しみは現実です。今崎さんとは50年をこえる心を開いた交流の継続です。そこでいま頭に浮かんでくることは、

「苦楽をともにした仲でこそ

わかる人生の味、庶民のこころ」——です。

初めての出会いは、あの「六〇年安保闘争」のときの群馬です(民擁連≡民主主義擁

護群馬県民連合)——以後、私は1961年から党本部勤務。そこで衆院選、旧東京八区から立候補。落選もありましたが、6期19年、国会に送っていただきました。

厳しい選挙戦、ここでも今崎さんの個性豊かな活動、たいへんお世話になりました。だがその今崎さんに再びお会いすることはできなくなりました。

しかし、今崎さんの作品、心、人柄はいつまでも私たちの心に生き続けます。

(日本共産党名誉役員、元衆議院議員)

生命輝く●上条貞夫

『友よ！未来をうたえ』の感動は、いまなお新鮮です。

(弁護士)

『良心の歴史をつくりたい』●嘉村健彦

突然のご逝去に大変おどろいています。今崎さんとの出会いは「報知争議」の時でした。1970年6月に発行されたパンフ『良心の歴史をつくりたい』(労働旬報社)の製作にあたって、大変お世話になりました。あのパンフが争議の勝利にどれほど貢献したか計りしれません。今でも本当に感謝しています。故人の在りし日を偲び、心からご冥福をお祈りします。

(報知争議で知り合う)

ると思いました。それはなによりも人間の尊厳であり、権力に対する多くの仲間を、自分の目線で、愛をもって描いた人だからでしょう。

私は下町人間の会や上野の森に「広島・長崎の火」を永遠に灯す会の運動に参加するようになり、今崎さんと直接話をする機会を得ました。人の意見に耳を傾け、慎重に発言される真摯なお姿が印象的でした。

思い起こすと「ご自分のお母さんの歩み」を書き上げ、下町総研（下町人間総合研究所）に原稿を持ち込みたいと言われた時、「自費出版しかお受けできない」旨、お伝えした時、電話の向こうで「そうですか、分かりました」と細い声で言われたことを思い出します。お役に立てず、申し訳ないことと今でも思っています。

（下町人間の会）

生協の活動から ● 菊池陽子

今崎さんとめぐりあうことができたのは、1980年代はじめころ。ヨーロッパ非核会議に派遣され、ドイツから帰ったばかりだったように思います。組合員の活動を取材ということではじめてお目にかかりました。オイルショック後、生協がどんどん大きくなっていった頃でした。協同での学びあいが広がり、お母さんたちが暮らしを変え、地域を変え、その力で社会をも変えられるのではないかと、そう、「ルネッサンス」だね

も、この大震災。鎖の重みを有難く背負って、大先輩の後を追いかけます。

(ジャーナリストの後輩〓毎日新聞)

半世紀以上も前の出会い ●北村 実

私もそんなに長くはなからう。初めて出会ったのは、半世紀以上前の、昔の早稲田だった。学部から大学院にかけて数年間、同じ空気を吸ってキャンパスをのし歩いていたころが忘れられない。その後は、たまに顔を合わせるだけだったが…合掌。

(昔の早稲田で)

かれこれ44年も前……●杵渕智子

今崎さんとお会いしたのは、柳沢明朗さんを通じてで、かれこれ44年も前になります。ドキュメンタリー作家として、すばらしいお仕事をたくさんなさいました。日本航空の労働者のこと、経営の体質について鋭く描かれた最初の方ではないでしょうか。

マスコミに、まだ民主主義と正義があった頃に人気番組(「判決」。日本教育テレビ・NET、現・テレビ朝日)のシリーズの脚本を書いていたことも存じております。ご病気になるられて、心配しておりましたが、お見舞いも申し上げないままお別れする

ことになり、心残りではありません。偲ぶ会にはぜひ参加させていただきます。（知人）

「はくせき白哲の貴公子」のような今崎さん ● 木村康子

はじめて、お目にかかったのは、もう40年くらい前のことで、「身体障がい者の女性の出産のドキュメント作品（『いのちの讃歌』〈労働旬報社、1970年12月〉）に感想を」と母親大会事務局にいらしたときでした。感動的な作品でした。

そのとき、「貴公子」の様な今崎さんに見とれた私でした。

（上野の森に「広島・長崎の火」を永遠に灯す会代表理事）

教育者としての今崎暁巳先生 ● 木村正明

今崎暁巳先生には、1980年から82年まで中央労働学院の土曜講座で「ルポルタージュ教室」を御担当いただきました。中労が港区から武蔵野市に移って東京文科アカデミーになってからも、84年、85年と「ルポルタージュ教室」を御担当いただきました。1年間に50人から80人の書き手の指導にあたられました。ルポルタージュの作家養成にたいへん力を注いでいただきました。

1987年に武蔵野外語専門学校になってからも、「日本語表現法」という科目（1

年間30回)を御担当いただきました。ルポルタージュ作家、シナリオ作家としてのお仕事の他に文章表現の指導・教育、ルポ作家の養成など多面的に旺盛に活動されてきたことが心に強く残っています、若い学生たちといつもニコニコと楽しそうに会話し、文章指導をしておられた姿が今でも思い起こされます。御冥福を心からお祈り申し上げます。

(武蔵野外語専門学校)

本作りの出発点●久保則之

小生、あけび書房を興したのが1983年2月1日。あの老人保健法が施行された日を会社創立日に選びました。その日の日記にこう記しました。「今後吹き荒れるであろういのち切り捨ての臨調行革路線に出版で抗してやろう。それも国民的読み物となる出版で」。そして最初に出した本が『沢内村奮戦記』です。

出版の道を志したには多くの先達の影響があります。中でも今崎暁巳さんと柳沢明朗(当時労働旬報社)社長の影響は大です。今崎さんとの出会いは1974年、小生が日本機関紙協会に入局し、月刊誌『機関紙と宣伝』の編集に携わってからです。よく執筆していただきました。ルポルタージュのことで熱い語らいをさせていただきました。地味で硬いと言われる福祉問題をルポルタージュで国民に訴えていく——お二人の影響が小生の本作りの出発点であり、基礎になっています。そして、1992年

先生は何を思うか ● 倉沢知裕

いまの日本の未曾有の大災害に接したら、今崎先生は何を思い、どんな発信をされるか、考えています。

(さいたまコープ、早稲田大学、ボート部OB、子育て文化協同研究会で教えを受ける)

いつまでも「若者はいま、歩みはじめる」 ● 黒澤幸江

今崎さんの数ある作品のなかで『若者はいま、歩みはじめる―高校生活への挑戦』(労働旬報社、1978年)に「この道のかなたに日本の未来をつくる若者の世界がひらかれているのだ」と書かれています。その言葉通り、未来に希望を抱き、精一杯歩んできました。地域に根をおろし、生協活動、映画の自主上映(シネマサークルおがわ)活動など、今崎さんにたくさんの励ましをいただきました。ありがとうございました。

そして、お伝えすることができなかったけれど、今夏、私たち親子は力を合わせて困難な状況にある庶民の暮らしを切り拓く一步を踏み出します。見守ってください。

合掌

(シネマサークルおがわ)

今崎暁巳さんを偲んで……●小生富夫

今崎さんと私の付き合いは、下町人間の会が主催する下町人間庶民文化賞授賞式とか、総会の時とか、大山での天狗講酒祭の時に来賓挨拶された時とかに、お会いする程度でしたが、静かに話をされていた印象があります。お亡くなりになったのは残念ですね。ご冥福をお祈り致します。

(戦争反対文化集団天狗講代表)

「日本ファイル」そして「ぞう列車」へ ●河野英雄

今崎さんと最初にお会いしたのは、存続の危機に直面していた「日本ファイル」を応援しようと、日本ファイル九州公演をスタートさせた昭和50年1月。九州公演初日の長崎市公会堂が満席になっているのを見て、とても感動され、その夜、遅くまで熱っぽい話が続きしました。その日の事は『友よ！未来をうたえ』に記載されています。

今崎さんは、その後も、たびたび長崎に来られましたが、ぞう列車がやってきたを長崎で、上演したいと情熱を傾けられ、生協と一緒に数回上演しました。信念と、情熱の人々今崎さん。私の生涯で、今崎さんと出会い、交友ができたことは、最も大きな

宝であり、誇りです。

(知人・長崎)

いつも現場で語りあえた人 ●小林雅之

今崎暁巳さんは、カコストロボ倒産によって日立資本相手に職場占拠闘争を続けていた現場によく訪れては励ましてくれました。

1970年代から1980年代は、日フィル再建闘争、沖電気解雇争議、日航差別撤廃闘争など大きな争議が相次いだ時代でした。今崎さんは優れた文学者であるばかりか、元々が労働法を研究されていた方でしたから、それゆえでしょう。彼の温かい眼差しは、なかには、労働運動の現状を見据える鋭い視点がいつもありました。

ときに怖いと覚えるほどでした。しかし未来に希望を持って頑張りましょう、といつも労働者を励まし続けた方でした。企業占拠した品川のアジトに集まってくる写真家、音楽家、文化人たちは、「労働と文化」についてよく議論をしました。「労働運動のルネッサンスを起こそう」と、今崎さんと二人で熱く語り合ったものでした。

彼は晩年、「ドキュメンタリーはねえ、もつと文学的地位が正当に扱われるべきだよ」と力説していました。その言葉はいまも重い印象となって残ります。

(元・全金カコ支部委員長、現・公務公共一般労組副委員長、

日本民主主義文学会会員)

淋しいことです●早乙女勝元

先輩たちが次つぎ他界していくのは淋しく、残念なことです。

今崎さんもお一人で、当日、あいにくと、重なってしまい参加できませんが、そのお人柄とお仕事を偲ぶことに致します。
(作家)

今崎さんの笑顔に励まされました●佐藤洋作

「協同」ということばに深く関わりはじめた頃、今崎さんに出会いました。

自分たちの仕事の方向性を手探りしながら活動していたあのころ、今崎さんには明るい笑顔で声をかけていただき、それに何度励まされたことか。

そして人びととの出会いの機会もたくさんいただきました。同じ郷里でもあり、隠岐の島にもご一緒する日を楽しみにしていましたが、とうとう適いませんでした。

今崎さんのあのすてきな笑顔を偲んで、心から哀惜申し上げます、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(NPO法人文化学習協同ネットワーク代表理事)

ことに気づかされたりしました。

高齢期運動を準備していた頃には高齢期問題で、医療生協の「患者の権利章典」づくりのときには患者と人権について有意義なアドバイスをいただきました。

人づきあいの不得手な私への配慮からか、事務所以外でお会いした記憶がなく、ただ議論をするだけのお付き合いでしたが、私には賛沢なひとときでした。映画の台本について意見をたびたび聞かれました。実現されなかったのが心残りです。

（日本高齢期運動連絡会）

安らかにお眠り下さい ●篠塚 潔

突然の訃報に驚きと悲しみを覚えました。私より先に旅立たれるとは思っていませんでした。私は1991年7月1日以後、ベッド上での闘病専一の暮しとなりましたが、故今崎暁巳さんはお便りで励まし続けて下さいました。

2006年に肺がん告知以後、私は命をいつ失うか不安な毎日でしたが、2011年2月になるも存えています。お励ましのお便りはいつも希望と勇気を与えて下さいました。ありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

私も命ある限り頑張ります。今は安らかにお眠り下さい。生前のお仕事が続けただけだと思います。

（日本民主主義文学会会員、友人）

すてきな出会い ● 篠原友恵

コープかながわ50周年記念事業の『すてきな出会い』を書いていただきましたことは、とても良い思い出となっています。今崎先生の足跡を偲びつつ歩んでまいりたいと思います。

(生協)コープかながわ元理事)

地域を住民の視点から変革していく運動を学ぶ ● 清水 洋

今崎先生とは、私が弁護士活動を始めた北法律事務所時代に、地球の共生を求めて「北区人權研究交流会」を開催したときからご指導をいただきました。

イタリアの「人民の家」をご紹介していただいたり、地域を住民の視点から変革していく運動に、ご支援をいただきました。

先生の不死鳥の如き復活を慶んでいたのですが、残念です。

(弁護士)

金属労働者だった今崎さん ● 下村三郎

今崎さんは短い期間だったが理学電機という会社の本社に籍を置いていた。私が労働者となった1960年、その前後のことだ。工場で働いていた私に当時の今崎さんの記憶はない。だが組合事務所に残る全国金属東京地本の大会議事録に、「政党支持の自由」を訴える今崎さんの発言が残っている。退職され「判決」のシナリオを書く頃になって、「ウチにいた今崎さん」の名前が語られた。団体交渉でやり合う相手が今崎さんの早稲田の同級生だったことも後に知った。

JMIUが結成された後に、顧問弁護士の鍛冶利秀先生が今崎さんと同窓だったり、不思議な縁を感じた。本を出されるたびにお贈りいただきながら、ご生前、ゆっくりとお話する機会があまりなかったことが残念だ。金属労働者の、できれば丸子警報器のたかいなども書いていただきたかった、と今さらながら思う。遺志を継いで労働運動だけは離れまいと誓う。
(元理学電機で共に働く、JMIU中央本部で)

不遜の一語 ● 新船海三郎

「十五歳の戦争」と表題された分厚いゲラ稿が今崎さんから届いた。2009年の秋だった。読んで、これを出版するについての意見を聞きたいという。それまでも何度

か、今崎さんからご自分の構想や書いたものに意見を求められたから、今回も気楽に引きうけた。内容は、今崎さんの体験に即した小説だった。重いものがあり、現代の、より年少の世代に、かつてこの国で戦争があったこと、そこを懸命に生き、真実に目を開いていった若者がいたことを知ってほしいという、真情に溢れたものだった。

しかし私は、主人公が伸びて大きく育っていかない、定定量の存在でいることに不満を持った。教導的であることも気になり、むしろエッセイにした方が生きると、先輩への言葉としてはいささか不遜な返事をしたためた。

それが、今崎さんに送った最後の手紙になった。言葉を足すことはもう出来ない。

(文芸評論家・日本民主主義文学会常任幹事)

輝く命 ● 清家洋子

今崎先生、出会いから人と人をつなぎ、きらりと輝く発見を教わりました。生産者と消費者を、作る現場の人と調理する主婦の交流をたがいに気持の通ずる大きな励みとなりました。輝くとは、日常の暮らしから発見、気づかせてくださいました。何と素敵なことでしょう！先生はいつも手帳に書き留め、笑顔で熱く語り合うお姿でした。

川口ぞう列車のステージを観に行き、ロビーで再会、多くの仲間と握手した昨年の夏。ぞう列車合唱組曲の存在を、柳沢さんと二人で何度も千葉へおいでいただき、伝えてくださり、誕生したのが「ちばぞうれっしや合唱団」です。多くの子どもたちが、この

ステージから卒業し、成長しています。全国にたくさんの出会いをつくってくださり、有難うございました。そして、この曲とともに、永遠に命優しく輝きつづけてまいります。

(コープちば生協を通じて)

テレビドラマ「判決」打ち切りで共にたたかう ● 関千枝子

今崎さんとは早大文学部時代の友人です。彼は仏文、私は露文ですが、卒業以来お目にかかることはなかったのですが、六〇年安保のデモの中でお互いにヤア、といいあいしました。その後、彼がテレビドラマ「判決」の脚本を書き、その打ち切りに抗議、立ち上がったとき、私はラジオ・テレビ記者会の一員としてともにたたかいました(当時の毎日新聞を見ていただければ、何件か記事があるはずです)。一貫してかわらぬ今崎さんの生き方に感動しております。

(友人)

今崎暁巳君について ● 芹澤寿良

今崎暁巳君とは、1950年10月の早稲田におけるレッドパージ反対闘争をたたかった時代からの友人の一人で、彼も当時、仏文の米川良夫、杉本時哉、須藤忠昭(いづれ

も故人）らの活動家集団とともに、文学部棟の前にバリケードを築き、一般学生へ抗議集会への参加を呼びかけるなど構内を飛び回っていたことが思い出されます。

仏文卒の彼が労働法を学ぶために大学院の法学研究科に進んだ事情や理由は知りませんでした。私も労働法を学び、労働組合運動の分野で働き、とくに民間大企業の労資関係の実態に関心を持ち続けてきました。その立場から彼の人間の尊厳と労働基本権保障の意義を踏まえた1970年代～1980年代の大企業支配の告発とそれに抵抗し、たたかう労働者の姿を描いたルポルタージュ作品の数々は、職場の自由と民主主義を守る運動の全国的発展と労働者の権利の法的保障と拡充を勝ち取った裁判闘争等に大きく寄与したと思っています。

この4～5年は毎年、早稲田関係者が会って近況交歓していましたが、昨年10月には欠席されたのでどうしたのだろうと心配していました。最近、1950年代からの仲間他界が続くなか、寂しさがつつています。

（早稲田大学学友、高知短期大学名誉教授）

お世話になりました ● 染谷正圀

吉岡吉典議員をしのぶ会に当っては、大変お世話になりました。

（知人）

偲ぶことば ● 高井統嗣

今崎さん、ご苦勞様でした。

あなたを偲ぶ会実行委員長の柳沢明朗さんは、私とあなたの間柄について、しばしば「活動分野も専門分野もちがう変なコンビ」と言います。しかし、私たちは、庶民の命と暮らし、文化と民主主義・平和をまもり「人間中心の世の中」をめざして力をあわせてきた仲でした。激変・激動のいま、人間の尊厳をまもりぬくたたかいが、いよいよ大切になっていきます。今崎さん、あなたの遺志をひきつぎ、この目標の実現をめざして力いっぱい頑張りぬきます。ゆっくりお休みください。（下町人間の会・下町総研）

福島原発・九条改憲へのつながり ● 高岡岑郷

九条の会講演会と重なっていますので、残念ですが、参加できません。

3・11東日本大震災による福島原発事故。正力松太郎と中曽根康弘による「元凶」への追及を、九条改憲へとつながるアメリカの対日戦略を暴くことが求められているとき、今崎暁巳さんのことがすぐ思い出されました。残念です。（東京革新懇）

いただきました。貴方は作家として人びとの痛みや喜びを現場で追いながら、変革への希望を見出すべく、その一生を費やしました。

貴方の心を糧に仲間とともに、大地震、津波、人災原発事故下の日本でたたかうことを魂の前に誓います。だから安らかにお眠り下さい。ありがとうございました。

（元全国大学生協連専務理事、前ちばコープ理事長、前千葉商科大学講師。

今崎さんは元ちばコープアドバイザー。生協に関する執筆・出版）

今崎さん、ありがとうございます●高橋米吉

今崎さんには3冊の出版物をお世話していただきました。『良心の歴史をつくりたい』は、「ロックアウト編」と「700人の記録」の2冊です。1969年から始まった報知争議のロックアウト攻撃から、それを跳ね返して就労、職場の再闘争に入るまでです。もう1冊の『吼えろ青春』（労働旬報社）は、後に千代田区労協の組織争対部長を務めた山田晃一君の青春時代を描いたものです。職場闘争の中心となって活動する若者が、職場の仲間と悩みながらも成長していく姿を描いたものです。

当時、青年婦人部長の山田君の下で副部長を務めていた私も何か誇らしげに感じた事を思い出しています。今崎さん、ありがとうございます。謹んでご冥福をお祈りします。

（報知印刷労組）

の運営などで大変お世話になりました。

お忙しいなかでも労をいとわず、世話人会にもよくご出席いただきました。会の運営についても、早稲田らしく変革的で文化の薫り高い。内容でと、発足総会に日フィルのメンバーを招請していただいたのも、今崎さんのご尽力だったと記憶しております。

残念ながら、木谷さんを国会に送り出すことはできませんでしたが、充実した活動ができましたことをあらためて感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

(元木谷八士秘書)

生活協同の試みへの熱い視線 ● 田辺準也

『暮らしのルネサンス』（1984年）で、めいきん生協（現コープあいち）、岡山コープ、さいたまコープ、の始まったばかりの生活協同の試みをルポしていただき、お母さんたちの思い、そして生協運動に人生の夢を描いた専従職員の思いに限りない信頼、共感を寄せていただいたこと、どんなに励ましになったか、今読み返しても新鮮、あの頃どんなに希望を持たせていただいたか、感謝に耐えません。

今崎さん自身の、人に対する優しさ、絆、つながりについての熱い思いがあればこそ、まだ、海のものとも山のものともされない時期の生活協同の試みに熱い視線を注いでいただき、生協運動に燃える力を与えていただいたのだと思います。

崎さん、安らかに眠りください。ご冥福をお祈り致します。

(元正則高校教諭・知人)

ヒューマニズムを基底にすえて●寺久保光良

今はもう無くなってしまった中央労働学院でのルポルタージュ講座で、初めて今崎先生のお話をお伺いしました。

その後、講座の卒業生でルポルタージュ研究会をつくり、今崎先生にずっと関わっていただき、私が学んだことは「ヒューマニズム」です。今後もそれを基底にすえて書き、考え、行動したいという思いでいます。

(現代ルポルタージュ研究会公員)

最後のメッセージ●とだ富田憲二

「革新オール島根の会」の忘年会の席だったと思います。「トダさん、今度、連載やるから取ってよ！」と声を掛けられ、2004年3月号からおよそ1年半、定期購読者になりました。その『民主文学』誌上の「人間として生きる 戦争をやらない人間の記録」が今崎さんから僕への最後のメッセージになってしまいました。

今崎さんは旧制松江中学時代の恩師である故藤原治先生（歴史家、教育者）と深く親

1970年代に展開された薬害スモンの裁判は、訴訟の規模といい、被害の深刻さといい、日本の司法にとって正に前例のないものでした(東京地裁可部所見)。この裁判は、人間の生存に対する国の責任を確立する基本を築き上げ、その後のHIV訴訟、公害・薬害・労災裁判に大道を切り拓いたといっても過言ではありません。

今崎さんは、1981年5月10日、この作品の「あとがき」で、こう述べています。

「私たち日本人は、高度経済成長の二〇年間で破壊されたもの、失ったものを取りかえし、人権をもう一度確立し、人間一人ひとりを大切にされるわれわれの文化社会を建設する時を迎えています」「この突破口を開いたのが、公害反対の市民運動であり、スモンのたたかいてもその新しい世界を一步押し広げようとしているのです」「『原子力公害』が大きく問題となろうとしている時、すべての人間・環境破壊とたたかう人間の運動が大きな連帯の輪となり、一人ひとりが主人公となる、新しいルネッサンス運動、国づくりを進めることこそ緊急に必要な課題だと考えます」

3・11東日本大震災・福島原発問題で世界が揺れ動いている今日、今崎さんのこの警告はまさに驚きです。今崎さんの、こよなく人間を愛する心が、原子力公害の恐怖を予知し、人間を守るルネッサンスにつながっているのだと思うのです。

惜別の思い、ただただ募るばかりです。(2011:4:5)

(弁護士)

ご冥福を ● 中川和郎

ありし日の故人を偲び、心からご冥福を祈っております。

(大学同級生)

先生の眼差しのやさしさ ● 中島祥子

文学教室で先生のルポについての講義を受けました。未だにルポは書けずに居ります。もう一度機会がありましたら先生の講義を受けたいと思いつつ、悲しいお知らせを受け取りました。出版記念会や、時には演奏会会場でお見受けする時、生き方がお姿に表われていると思うことしばしばでした。先生のやさしさにあふれる眼差しを今、しみじみと思い返しています。

(民主文学萌葱支部・文学教室生徒)

今崎暁巳さん、ありがとうございます ● 中島文男

日本フィルハーモニーや沖電気争議支援、北区の人権と民主主義を守る運動のなかで、「人と人とのきずな」の大切さを教えていただきました。本当にありがとうございます

ました。東日本大震災で多くの人がとが被災に遭いました。先生が大切にされてきた「人と人とのきずな」をつくっていくことは、希望を生み、復興の大きな力になると思いますが。私も人間大好き目の線の生き方を大切にしたいと思います。（友人）

平和と社会進歩に献身●中祖昭規

中国地方の名山・三瓶山の山麓のすばらしい大自然の大きさを共に楽しんだ郷土の先輩。平和と社会進歩に献身した生涯に、心からの敬意を表します。

（北区革新懇代表世話人・事務局長、革新オール島根の会）

永田廣志の映画化を望むなら●永沼孝致

2008年6月に『日本における唯物論の開拓者―永田廣志の生涯と業績』（学習の友社）を発売に到る過程で、大変お世話になりました。

永田廣志の娘さん・今崎則子さんには、原稿をいただいた上に、東京のお宅に鱈坂先生と私たち二人（宮田哲夫・永沼孝致）が訪問しました際には、貴重な資料である無宗教葬の時の弔辞13通のコピーをいただき、ご主人の今崎暁巳様からも、いろいろとお話

をお伺いすることができました。そして最後のお言葉が、いまでも耳朶に響いているのです。『永田廣志の生涯と業績』の映画化をみなさんが望むなら、私の知り合いに優れた人物がいますから紹介しますよ」ということでした。

（永田廣志研究会役員）

古い友人として ● 中藤泰雄

今崎さんとは、古い友人、長い付き合い、なんでもしゃべり、率直な意見を言える仲間でした。彼は、多くの問題に真正面から取り組んでいく人で、いろいろと教えられました。

突然の訃報に呆然としましたが、とても残念です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（株）ジャパンアーツ会長

いつも励ましてくれることばかけ ● 中村 博

どこではじめてお目にかかったのか……、教師をしていた私が退職した頃、『子どもらに夢と力を!!』（労働旬報社、1980年1月）という本を出版した。

その頃、出版社の柳沢明朗氏から声をかけてくれたように思います。40年以上も前のこと……。言葉が美しく力強かったことが想い出されます。教員仲間の言葉とちがって、

文化が私を、そして次の目標に向って歩き出したように思うのです。

お病気を知ってTEL、その電話口でも歯切れのよいいつもの言葉。それが聞こえなくなつて。教育と文化と子どもを結びつけて、これからも世に発言をしていくことが私の…仕事。

(子どもと民話の会)

今崎さん、ありがとうございます●なかむらみのる

日本民主主義文学会のいろいろな会議で一緒にしました。本当に静かな方でした。しかし会議では必ず発言し、ご自分の今書いている仕事についてその意図を語っていました。低く静かな話し声はまだ聞こえるような気がします。

私は中年代から手探り状態で小説を書き始めました。右往左往する私に、長く労働生活を経験してきたことが、物書きにとつてどんな貴重な財産であるか、私の耳元で静かに語ってくれました、社会の真実を求め、人間の絆をつむぎ続けてきた方の言葉として、どんなにか私を励ましてくれたことでしょう。

私は、人生の真実を、明日を見つめ今日を真剣に生きている人びとの真実の姿を、書き続けます。そのことを今崎さんに誓います。 3 / 23 (日本民主主義文学会公員)

『学力への挑戦』で講演していただいた今崎さん ● 仲本正夫

今崎さんの『コブだらけの勝利』は1969年の作品だという。なつかしい作品である。40数年前のその年は、私がある私立高校で組合結成を準備していて発覚し、電話1本で解雇された年でもある。

その後私は、組合を結成し、教職員組合運動にかかわっていくことになるのだが、「私学に憲法なし」といわれたきびしい時代に、今崎さんの作品はこぶだらけになってたたく教師に限りない激励と人間としての誇りを与えていた。

その今崎さんが、急に身近な存在となってきたのは、労働旬報社から出版した拙著『学力への挑戦』（1979年）をとりあげ、「今崎が、微分積分の本質は分析と総合ということであり、すべての国民が身につけるべき共通教養だと講演で話していた」ということを、当時の社長の柳沢明朗氏から聞いたときからであった。

そのことで今崎さんとゆっくり話し合う機会がもてないままの痛恨のお別れとなった。今崎さんのご冥福をお祈りいたします。
(元私立高校教師)

人間と日航の未来のために ● 仲本政良

沖争議の時代的意味を問い、若者群像を描いて、全国に沖争議支援を広げる強力な武器をつくってくれました。この本づくりに、当事者として、時々立ち会いましたが、当時の労旬の柳沢社長、飯島さんなどと熱い議論を交わしながら何度も書き直しを重ねる作業に「たたかひのルポルターージュ」の一面を垣間見たものでした。

今崎さんは争議の解決まで、ずうっと沖電気争議を見守り支援し続けてくれました。争議の力になる人を紹介し、さまざまな人と争議団をつないでくれました。私にとつては、その絆がいまでも貴重な財産となっています。
(元沖電気争議団事務局長)

本として読みたかった母上の物語 ●西亀百合子

今崎先生と初めてお会いしたのは、1982年出版の『ドキュメント日本航空』執筆のためのインタビューでした。この本は、当時、10億円賃金差別とたたかっていた日本航空労働組合の運動を広める大きな力となりました。

それから約30年、出版記念集会や日フィルのコンサートで数年おきにお目にかかるというおつきあいでした。

そういう折に伺ったさまざまなお話の中で忘れられないのは、先生の母上の物語でした。その長い物語を伺ったとき即座に頭に浮かんだのは、ロマン・ロランの小説のヒロ

インの名でした。ぜひ本にするべきですと僭越にも申し上げました。先生は「そうですねえ」と微笑まれただけでしたが、私はその後、機会があるたびに「『魅せられたる魂』はどうなっていますか」とお尋ねしたものでした。

30冊を超えるご著書をはじめ立派なお仕事を達成されての旅立ちですが、私にはこの本を読むことができなかつたことが本当に残念でなりません。先生の新たな旅路が安らかなものでありますように。

(日本航空空勤組合元組合員)

ルポを書く情熱 ● 西村一郎

私の所属する現代ルポルタージュ研究会の顧問を今崎さんには長くしていただき、昨年11月の例会がお会いする最後となった。参加者が遅れ、待っている間に次作の構想について今崎さんから話をうかがった。戦後の激動期の中で、自らがどう生きてきたのかをまとめるとのことで、これまでにない作品のイメージだった。

その前の例会では、会場入口の階段で動けなくなり、青い顔で帰られた。11月も顔の血色はよくなく、亡くなる1カ月前であった。

最期までルポを書く情熱を私も持ちたい。
(現代ルポルタージュ研究会会員)

映画『あしたの火花』づくりからいっしょに●西村直樹

今崎さん、70年代から80年代にかけて、しょっちゅう一緒だったという記憶がありません。当時、私は総評全国金属東京地本の専従者。65年に劇映画『ドレイ工場』をつくったのち、次の映画『沖縄』を作るまでは東北の農村の出稼ぎ調査などを進めていきましたが、そのあと、「お前はこっちの方が向いている」という佐竹五三九さんの指示で、調査部にまわりました。ここでは家計調査をやり、労働時間短縮の理論面を勉強しました。そういう時、渡辺製鋼の船台に大型船が入っていたのをモデルにして映画『あしたの火花』ができました。そのそばに私がいました。

『沖縄』の赤字解消のため、もう一度、日本ロール争議に題材をえて映画『どぶ川学級』を作りましたが、その姉妹編のような『巣立ちのとき 教育は死なず』のシナリオに意見を言ったりしました。

：私が文化運動離れして、おつきあいが途絶えました。暮れの12月18日、「しんぶん赤旗」を見て驚き、きりぬいて手帳に貼ったものです。（元総評全国金属東京地本）

イタリアへ二度ごいっしょに●二宮厚美

今崎さんとは1980年代半ば以降のつきあいでした。特に80年代後半から90年代前半期には、大阪よどがわ市民生協を通じて親しくさせていただき、イタリアに二度いっしよに出かけたことがあります。

今崎さんに強く学んだことは、研究には現場の声を聞くことがまず重要だということです。今崎さんは、ともかく現場の話を聞く、声をひきだすことに徹底していました。その姿を今でも思い出すことができます。これを忘れないようにしたいと思っています。

(神戸大学教授)

〃 出会う 〃 ● 根本 保

第一印象——島根県隠岐島より静岡市立城内東小学校へ転校した今崎君は垢抜けした利発そうな少年に見えた。

教室——授業中、先生との対話にそつが無く、はきはきした明るい姿勢は、多くの級友の羨望的だった。いつも謙虚な態度は素晴らしかった。

課外活動——4年生から小学校卒業まで共に剣道部に所属、朝夕の激しい稽古を重ね、一緒に県大会団体戦に出場、準優勝。あのとときの喜びと悔しさは格別だった。今崎君のじつと耐えていた姿は、いまだに忘れられない。

戦後の出会い——君と同じ静岡中学校（現・静岡高校）に進学するも、3年生中途で学徒動員。そして終戦。厳しい戦後生活に音信途絶えがち。

20年前に級友の森川君を中心に城内東一七会発足。数年前、今崎君と再会でき、昨年秋、『北の砦―ルポルタージュ鳥生忠佑と北法律』（日本評論社、2009年6月）をいただいたばかり。祈冥福。

（静岡市立城内東小学校の級友）

子育て文化協同の運動で一緒に●野々垣務

今崎先生には、ずいぶんお世話になりました。

子育て文化協同の運動では、全国各地にご一緒してくださいと、生協や子ども劇場の方々をご紹介していただき、集会成功にお力を貸してくださいました。

また、ぞう列車の運動では、柳沢さんとともに子どもや親たちに希望を話され、その映画化にも夢をもって脚本を書かれましたが、実現されなかったのは、心残りだったと思います。

川口ぞう列車を指導していた高校教師の長谷川良雄君の聞き取りをされていました。先生より先に若くして、急逝してしまったことは、先生にとってどんなに悲しいことだったでしょう。

また、個人的な思い出としては、拙宅でイタリアのリアリズム映画の名作、4時間の長い「1900年」という映画を藤岡貞彦さん、柳沢社長、長谷川君などと酒を酌み交わしながら鑑賞し、語り合ったことは忘れられません。

弱きものにもいつも勇気を与えてくれた人 ● 波多野章

穏やかな微笑を浮かべ、包み込むような語り口で励ましてくださった今崎さん。そんな先生が、この世から消えてしまったことは誠に残念です。

私は、日航労組OBで1982年9月に出版された『ドキュメント日本航空』の著作をお手伝いしたのですが、著作ばかりか私たちがたたかっていた「差別撤回闘争」解決に先生は心血を注いでくださいました。

先生の御尽力に心より感謝するとともに、格差社会という形で私たちの問題がさらに蔓延している今日、高齢にはなりませんが、私たちもその改善に努力せねばと思っていますので、天国からのご支援くださるようお願い致します。
(元日本航空労組)

ご苦勞さまでした ● 浜口武人

長い間ありがとうございました。夫婦ぐるみのお付きあいでしたが、今崎さんは闘争史の執筆者として、私は弁護団の一員として、いくつかの争議現場で顔を合わせたものです。合掌

(弁護士)

革新オール島根の会で出逢つて ● 原 徹

「宮本顕治さんを国会へ」と「革新オール中国の会」を結成し、その後、「革新オール島根の会」に発展させる中で、今崎さんの活躍に大いに勇気づけられました。

郷土島根の大先輩「今崎さん」「吉岡吉典さん」たちの活躍に、明日の希望をもつて前進できたと思います。私自身も石播争議団の人生を歩み、今崎さんの活躍を励みにしたものです。ご冥福をお祈りします。安らかに！
(革新オール島根の会)

感動した『いのちの証言』 ● 原美佐男

島根県人会での諸行事を通して、私は今崎さんを知るようになりました。今崎さんの挨拶は物静かで、落ち着いた話し振りでしたが、その中にもロマンや情熱が込められていて力強く感じていました。そんな今崎さんから、『いのちの証言』（2006年、ふきのとう書房）を読んでみませんかと勧められました。主人公の好太郎（好っちゃん）の、何事にも一生懸命に努力して事を成し遂げていくという素晴らしい生き方に、私は大きな感動を覚え、私にとっての貴重な学びとなりました。そして、『いのちの証言』を読んでいると、好っちゃんと今崎さんが二重写しに感じられるという不思議な感覚も味わうことができま

した。

今崎さん、これまでの心を砕いたお付き合い、ありがとうございました。他界との報を受け取り、残念な思いでいっぱいですが、謹んでご冥福をお祈りいたします。合掌。

（革新オール島根の会）

「ガンバレ日ファイル」出版記念会でのこと ● 日野三朗

今崎さんの著書『友よ！未来をうたえー日本ファイル物語』（正・1974年、続・1977年）、の「ガンバレ日ファイル」出版記念会が1977年、日本青年館で開催されたときのことです。国鉄労働組合の顧問で早稲田大学教授の故野村平爾先生からの熱烈なメッセージが読み上げられました。それは交響曲「風雪」が国労全国大会で日ファイルオーケストラと風雪合唱団の演奏についてでした。私は全身にこみ上げる感動で、とめどなく流れ落ちる涙で床をぬらしました。それから間もなく先生は亡くなりました。国労本部は先生の追悼文を機関誌『国労文化』に発表するということで、私はその記事について申し入れ、書きました。そのとき、このメッセージを今崎さんをお願いしてコピーをいただきました。

このことについては私の著書『レールよ高らかにうたえ』（文芸社、2007年）にも書いてあります。ご冥福をお祈り申し上げます。（国鉄のうたごえ顧問）

前向きの人 ●比留間柏子

1960年の春、私がいた会社に今崎さんが入ってきました。安保闘争の年で、組合づくりと相俟って若者たちは高揚していました。歌声、平和の会、デモへと運動が広がり、彼はオルガナイザーとしての役割を果たしていました。ソフトで、自然にみんなのなかに融けこみ組織していました。3年後、彼は突然、会社を辞めました。彼には次のステップへの構想があつたのでしょうか。後ろに引かれる事もなく、ひたすら自分の成すべき道に向かつていました。ルポライターとしての出発です。数年前、40年ぶりに再会しました。大病のあとが見られましたが、夢を語り能弁でした。中国やロシアまで取材に出かけ、ごく普通の誠実に生きた人を温かい目で記録していました。

彼はどんな困難に遭っても悩まず疑わず、自分の進むべき道を信じて進むという楽天的な意志の強さを持っていました。今年正月、彼から年賀状が届きませんでした。

やり残したことがあつたでしょう。残念です。

(理学電機時代の同僚)

心からご冥福を ●藤井 都

今崎暁巳様、ここにお別れをさせていただきます。心からご冥福をお祈りいたします。

(知人)

穏やかな中に情熱がこもった作品 ● 藤田越子

今崎さんは穏やかな中に、その作品には情熱がこめられ、いつまでも若々しい方だったと思います。9条の会の活動でgoいっしょでできたことは、大切な思い出です。ご冥福を祈り、ご家族の皆様のご健康を願っています。

(知人)

ㄥ 灯の会 ㄥ 中でお会いできた ● 藤村記一郎

6月4日、すでに抜けられないリハーサルが入っていて何うことができず残念です。今崎さんについては、学生時代に『友よ！未来をうたえー日本フィルハーモニー物語』が労働旬報社から1975年に出されたのを、感動をもって読んだことを思い出します。「その日フィルが私の師・寺原信夫先生の『マンモス狩りは夜明けに始まる』を演奏し、ハチャトリアンが指揮をする」という音楽会を名古屋で計画し、幻となってしまったことも。

雲の上の方だった今崎さんと、その後ㄥ 灯の会 ㄥ 中でお会いできたこと。心からご冥福をお祈りします。

(知人)

群馬の勤評闘争の実態調査時から

ルポルタージユの才が●古屋孝夫

ルポルタージユの新しいスタイルを築き、働く者の団結と権利のたたかいに大きな貢献をなされた今崎さんの御逝去に心から哀悼の意を表します。

学生時代共に群馬の勤評闘争の実態調査をした時からルポルタージユの才が示されていたことを思い出し、また、近年は地域の西ヶ原・上中里九条の会の活動に努められ、草の根からの共同を大切にされた姿に敬意を表します。その遺志を受けつぎ運動の発展に努めたいと思います。

(早稲田大学大学院時代からの友人、最近は地域九条の会で協力)

ルポルタージユの先駆者●松井繁明

今崎さんが健康を回復され、執筆活動を再開したのを知って喜んでいたのでありますが……。いまではルポルタージユという文章の形式はごく普通のものになっていますが、60年代後半のころにはまったく目新しいものでした。今崎さんはその先駆者の役割をはたされたのです。

今崎さん、時代はますます奇怪になっていますが、どうぞ安らかにお休みください。ご交流を貴重なものと受け止めています。ありがとうございます。

(1960年代千代田争議団時代からのお付き合い、弁護士)

希望・勇気をあたえ続けてくれた今崎さん ●松本克巳

今崎さん、長きにわたって私たちの代弁をしていただき、ありがとうございます。そのことによって、どれだけの力が寄せられたことでしょうか。

その感動が希望の光となつてさしこんできます。ご冥福をお祈りします。

(日本フィルハーモニー交響楽団)

理想の社会をめざし、自らも争議団の

心意気 ●松本謙司 (まつけん)

1978年11月、沖電気で指名解雇が強行されてから8年4カ月後の1987年3月に勝利解決、その後も熱烈な愛情をいただきました。

労働運動のイロハも知らず運動からも見放された平均年齢30歳の71人は「捨て子の争

「議団」と呼ばれる困難なスタート。24歳の女性団員が解雇されるまで「こわいよ」と怯えた日々。支援要請先の労働組合でカレライスをご馳走になり「日本の国にもこんなに暖かい心の労働組合があることが嬉しくて」と、団員一人ひとりが、泣いて笑ってたたかい続けている現実をペンで描くことで争議に参加。

現実の中に真理があり、発展の可能性があることを描こうと活動されました。

著書・沖電気指名解雇をこえて『なにをみつめて翔ぶのか』（1980年）の最後の一文――「労働者階級の新たな連帯が、大いなる時代をきりひらき、真の働くものの世界に、力強く前進し始めているのだ」、もその証左です。
（沖電気争議団OB）

全国に広がった日本フィルのたたかい ●松本伸二

今崎さんが書かれた『友よ！未来をうたえー日本フィルハーモニー物語』（労働旬報社、1975年）とその続編（1977年）によって、日本フィルのたたかいは全国に広がり、大きな支援の輪ができました。

執筆の過程の中での、執拗な取材にはときには閉口しましたが、本を読んだ人びとからの励ましによって、たたかいへの確信が持てましたし、一方でともすればくじけそうになる気持ちを支えてくれました。

温和なまなざしの奥に秘められた、物事の本質をとことん追求するクールさと、しい

たげられた人びとの人間性を尊重する温かさ、その二つが今崎さんの著書のいずれにも満ち溢れています。それまで音楽バカといわれていた私も、いつのまにか今崎さんを取り巻く人びとの絆に引き込まれ、多くの魅力的なひとつながることができました。

お目にかかるたびに、いま取り組んでおられる仕事を熱く語られ、その中には、日本フィルの松本克巳さんの本の出版も含まれておりましたが、それが日の目を見なかったことは、残念でなりません。ご冥福をお祈り申し上げます。

(元日本フィルハーモニー交響楽団労働組合執行委員長)

「日フィル物語・炎の第五楽章」を映画化●松本 平

今崎さんのご逝去、心よりお悔やみ申し上げます。

私は、日活労組委員長時代、今崎さんのたたかう労働者の著作をよく読ませていただきました。今崎さんの著作は映画化されるものも多く、会うたびに映画の話を楽しみました。物静かな中に強さがあり、情熱的に語る今崎さんの話にいつも心を動かされました。そのようなお付き合いから今崎さん原作による「日フィル物語・炎の第五楽章」も映画化が実現しました。

この数年、お会いする機会を失っていたのですが、「今年こそお会いしましょう」と年賀はがきに書いた直後の訃報に目を疑う思いでした。

本当に残念に思います。

ご家族の皆様には哀悼の意を捧げ心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(元日活労組委員長・(株)日活元専務取締役、友人)

私をよく理解し、励ましてくれた●松本哲男

今崎暁巳さんとは学生時代に知り合い、侵略戦争敗北後の荒廃のなかで、どう生きるべきかと、学生たちとよく話し合ったものです。そんなとき今崎さんは、よく考え、言葉少なに大事な発言をする。そういう発言が私の胸には強く残ったものです。

その後私は、1950年、朝鮮戦争についての「イールズ声明」(戦争に反対する良心的教授の大学追放)に反対するたたかいで大学を除籍・逮捕されていたので、今崎さんとも会う機会が少なくなりましたが、それでも会ったときには、パージ後で、職もなく、苦難のどん底にありながらも前向きに生きようとする私をよく理解し、励ましてくれました。

またその後、私が日本共産党の中央で働くようになってからは、普通の友人、同志として、いつも「がんばれ」と励ましてくれました。

そんな今崎暁巳さんに、先に逝かれてしまったことは、ほんとうに残念なことでした。

(友人)

希望を語りつづけた今崎さん●三上 満

今崎さんと知り合ったのはもう何年前になるでしょうか、柳沢さんの労働旬報社から私も『わかる授業』（1974年）など何冊か本を出し、同じように、すぐれたルポルタージュを出版されていた、今崎さんと知り合いました。

今崎さんの作品すべては、「人間讃歌」とも言うべきもので、その人柄いつぱいの暖かさが全篇をおおっていました。人びとを上げまし、希望を語りつづけた今崎さん。心よりご冥福をおいのり致します。

（下町人間の会）

父は「辰野事件」の被告●三澤節子

先生との出会いは昭和47年、私の実家に來られた時です。当時、父は「辰野事件」の被告でした（私の母は若くして小さい私と弟、義父を残され夫に先だたれ、生活の為、失対で働く中、父と知り合い再婚）。昭和27年、警察によってデッチ上げられたこの事件、先生は各被告の家をまわられ取材をしておられました。間近でお目にかかったのはその時一度だけだったのですが、温和なお顔をおぼろげながら思い出します。そしてその年の12月、皆さまのおかげで無罪を勝ち取ることができました。

以来ずっと、年賀状でのご挨拶を続けさせていただいておりましたが、今年は先生からの年賀状が届かず、どうされたのか心配していた矢先、先日奥さまからのお葉書で、訃報を知らされ本当にびっくりしました。偲ぶ会には出席できませんが信州の地からご冥福をお祈り申し上げます。

(元辰野事件家族)

たばこ病をなくす横浜裁判、原告として ● 水野雅信

私はかつて横浜市従労組の教宣部長や三役をつとめておりました。今崎先生には私どもの労働学校の講師をしていただきました。その後「横浜たばこ裁判」原告となり、先生には何度か傍聴をいただきました。「高校生たちがたばこのみにならないよう、わかりやすいパンフレットをつくりましょうね」とおっしゃっていただきましたが果たせず残念です。僕はすでに重い肺気腫で身動きとれませんが、先生のお気持にこたえて裁判勝利をめざします。

(友人、元横浜市従労組委員長)

今崎暁巳・小倉寛太郎・山崎豊子

そして恩地元が… ● 溝畑和利

ボクが『ドキュメント・日本航空―国民の翼をめざして』（労働旬報社、1982年）

を読んだのは、1982年に出版されたスグの頃でした。人間的魅力この上ない人、小倉寛太郎さんを中心に日航の労働者を——小倉さんを9年余、外国勤務に追いやった人びとを含め——優しい眼差しと筆遣いで、そして怒りの感情を節度ある易しい文章で、一人ひとりを描写されていたことを、今も憶えています。それ以来、会ったこともない小倉さんをカンタロウさんという親しみと敬愛の念をこめて呼んでいます。

今崎さんとの出逢いは厳しい対立をルポした本でしたが、「温かいものを感じた」ものでした。

数年前、「横浜たばこ裁判」（原告の一人・水野氏は友人）公判の日、今崎さんは遠路、横浜地裁にお出かけ下さいました。今崎さんとの初対面は水野氏の紹介でした。その後、数度お会いし、映画・芝居のことを話させていただきました。

今崎さん！ もっとお会いし、話をお聴きしたかったです。

謹んで今崎さん 小倉さんに合掌。

（横須賀市・知人）

今崎暁巳さんの志をつないで ●道下英夫

32年と少し前、沖電気争議が始まり、芝浦事業所（東京工場となる）の職場から争議支援活動を行ったが、『なにをみつめて翔ぶのか—沖電気指名解雇をこえて』（労働旬報

社、1980年)の著作が発行されて今崎さんを知った。

ほどなく高校同窓先輩の板垣さんより「革新オール島根の会」の会合に誘われて出席したところ、今崎さんが代表幹事で話をされた。以後は、数度、「赤旗まつり」や国政選挙のある時に共産党の島根県出身の議員や候補者を励ます会でお話しさせていだいた。ここ数年の年賀状でも、憲法9条を生かし広げるために創作意欲に燃えた生き様を示しておられ、『北の砦—ルポルタージュ鳥生忠佑と北法律』(日本評論社、2009年6月)の出版報告をされました。

同県人として誇りに思い、今崎さんの志をつないで生きたいと思います。ご冥福を祈ります。
(革新オール島根の会)

もつと長生きしてほしいかった●三井敏雄

今崎さんは短い出会いでしたが、『いのちの証言—私は毒ガス弾を埋めました』(ふきのとう書房、2006年6月)を熟読し、今後もこのような小説を期待していた矢先の逝去でした。残念です。偲ぶ会当日は、「日中友好協会」の全国大会がありますので、欠席いたします。合掌
(同県人)

常に前向きの人 ● 宮腰 賢

1984年7月、今崎暁己さんは、大学生協連の学生委員長研修セミナーで「暮らしのルネッサンス」という題目で、講演をなさっています。

「日本生協連が発行している『生協運動』という、主として職員の方に読まれている雑誌がありますが、それで、昨年ぐらいいからまるまる1年半近く、月のうち取材に1週間〜10日、書くことを合わせて半月から3分の2くらいを、生活協同組合の運動にかかわって暮らしてきました」とおっしゃって、全国の生協活動を紹介し、「若者たちが明日の日本を育て、創り出す」と結んだ講演でした。

これを機会に、全国の大学生協を取材なさって『UNIV・COOP』に探訪記事をお寄せくださったのでした。この記事によって、どれほど多くの教えを賜ったことでしょうか。あの時代の大学生協活動を力強く支えてくださった恩人でした。

(知人、元東京学芸大学―大学生協連、千葉市民生協)

継承すべき多くのものを残された ● 宮寺清一

『民主文学』（2011年5月号）に今崎さんの業績に関わる一文を書きました。継承

すべき多くのものを残されたと思っています。(日本民主主義文学会会員)

「'99子育て文化協同かながわ集会」の想い出 ● 森悠紀子

神奈川の藤岡貞彦先生、柳澤明朗さんを中心に白熱した議論が展開されるわけですが、そのかたわらで実に居心地よさそうに、にこやかにうなずいていらした今崎さんの姿が目には浮かびます。このおじさんたちの青年のような情景が、私の宝物になっています。

(コープかながわ元理事)

ある思い出 ● 山形暁子

十五、六年前、「住民と自治」という月刊誌に「松の見える町から」と題するルポ風エッセイを連載させていただいた。

私が36年間働いた都市銀行を退職して間もなくのころだ。今崎さんがかねがねおっしゃっていた「地域に入ると、企業の中だけでは見えなかった、別のものが見えてくる」という言葉を、改めて実感したものだ。

地域に根ざしたさまざまな運動との出会いのなかで、とりわけ印象深いのは、賃金・昇格差別とたたかう明治乳業争議団市川工場32人の男性たちの存在だ。裁判所の勧告に

も応じない卑劣な企業とのたたかいは、今もなお続いているが、1991年に発行された冊子『俺たちは負けない―人間らしく生きるために』には、連帯ある生活を創り始めた青年たちを、熱い眼差しで捉えた今崎さんのルポ「雪の下で準備する春」が載っていた。あつ、ここにも。思いがけない巡り会いだった。

（日本民主主義文学会公員）

良心を守るたたかいを伝えてくれた人 ● 山口克己

1969（昭和44）年から始まった「報知争議」を通して、労働旬報社のみなさんとお付き合いが始まりました。争議は悪質な攻撃にあり、兄弟や夫婦が、また家族まで引き裂かれていきました。これは労働組合運動というより、人間としてどう生きるかのたたかいでした。その中から生まれた『良心の歴史をつくりたい』（新聞労連報知新聞労組・報知印刷労組・報知大阪労組編、労働旬報社、今崎暁巳執筆協力、1970年6月）の本が今崎さんと編集労働者で出版されました。

争議の全面勝利によって、労働のみなさんで『早く高く勝利を』（報知系3単組共闘会議編、労働旬報社、1976年）が出版されるなど、報知の労働者にとって今崎さんは忘れられない方でした。心からご冥福をお祈り申し上げます。

（元報知印刷労組委員長）

一生の仕事となった学生時代の約束 ● 山口義夫

(一)

昨年末、「今崎暁巳死す」との訃報を聞いて心に浮かんだのは、学生時代、私が提案し、彼が引き受けた約束です。「作家になるのならフランス抵抗文学のルイ・アラゴンのように日本のレ・コミュニストを書いてもらいたい」という私の提案に対し、「俺は作家として必ずそれを書くよ」と彼は約束しました。

当時は米軍占領下で朝鮮戦争が行われ、レッドページの暗黒政治のもとで、この約束が生まれました。

(二)

今崎暁巳さんと私が初めてあったのは、私が18歳、早大旧制第一高等学院2年生の時です。全学連の教育復興防衛闘争の中で、下駄履きでビラを脇に抱えた新入生を同級生の梅田欽治さんに紹介されました。

それから63年、テレビドラマ・「判決」シリーズのシナリオライターとして世に出た彼を守り偏向映画攻撃に反対し、外国通信社労働組合書記長・新聞労連執行部としてマスコミ共闘を組織してたたかいました。

その後、東宝労組移動映画工作隊に入り、共同映画株式会社をつくり、安保反対映画製作協議会、労働組合視聴者活動研究集会、民主映画自主製作上映協議会、親子映

画運動等とともに生みだしました。そのなかで『コブだらけの勝利―闘う青年労働者』（労働旬報社、1969年）以後の多数のたたかう労働者を描いた単行本とエッセーの発行、映画「あしたの火花」「ドレイ工場」「どぶ川学級」の製作上映にも協力しました。今崎さんのすすめでイタリアの民主的文化運動と統一戦線の見学に行ったこともありま
した。

(三)

忘れられないのは、金子満広日本共産党書記局長地元秘書として、私が今崎さんにしたので『人生つねに始発駅―下町の代議士 人間金子満広』の製作・発行を多くの人の協力を得て二人でやったことです。

日本版「レ・コミュニスト」を本当に書いてもらい、学生時代の二人の約束を実現する共同作業になりました。この本は1990年、ソ連崩壊の最中に8000部普及され、人間不信に陥っていた人びとの立ち直りの力となりました。二人の約束を大切にして、戦前・戦中の彼と母との成長を描いた最後の彼の作品を発行してあげたいと今も考えていることを付記しておきます。

（下町人間の会会長）

次世代へのバトンを創るいとなみ ● 山科三郎

今崎さんはルポルタージュを、現実の厳しい矛盾に生きる人びとの希望を拓くたたか

いの武器とした。

私は、彼のつきあいのなかで、人間の尊さ、もっと正確に表現すれば、歴史の重みをうけとめ、いまここに生きる。ことの意味を問いつづけてきた。そのプロセスが氏の生きた軌跡であろう。

氏の思いは、私たちの中で永遠に生きると考える。散文的ではあるがこれを以って、私の献辞としたい。
(哲学者)

ありがとうやさしい兄貴！●山田 晃一

昭和44（1969）年からたたかわれた報知争議を通し、労働旬報社の柳沢編集長の紹介でおつき合いが始まりました。争議中に行われたさまざまな集会、勝たせる会の催しなど常に顔を出し、報知争議勝利の一翼を担っていただきました。

私との個人的関係では、私を題材にした『民青新聞』での連載「さよならのいえないヤツ」（その後の小説『吼えろ青春』〈労働旬報社、1975年〉）の出版など大変お世話になりました。

体調不良は伺っていましたが突然の訃報に驚いています。やすらかに…。

（報知新聞争議を通して）

真正面から肯定されたこと ● 山田多恵子

今崎先生との出会いは今から20年以上も前のことになる。ちば市民生協が合併するにあたり、「暮らしごと一緒に」という本をつくることになり、新しい理事長が今崎先生を連れて来られたことが始まりだった。

生協の事務所で、労働旬報社の柳沢さんと今崎先生、今はなき田中さん（元ちば市民生協専務）、高橋さん（元ちばコープ理事長）と理事たちとの編集会議みたいな会議が始まった。28歳ぐらいから生協の活動にかかわり、10年余がすぎた頃でもあった。自分たちが行っていることが真正面から肯定されたことがとても心地よかった。主婦であることがどこか社会から取り残されているようでもあり、余り評価されたこともなかったからである。

暮らしのなかでの子育てのこと、安心・安全な食べものを家族に食べさせたい、広めたい。そんな思いをつなぎ、結びつけていくことを教えていただいたように思う。千葉で「ぞう列車がやってきた」を開催できたこと、子育て文化協同集会への参加。いろんな方々との出会いをつないでいただいた。本当にありがとうございました。

（千葉県生活協同組合連合会勤務、元ちばコープ理事）

今崎暁巳さんと日本フィルと私 ● 山本武司

日本フィルハーモニーの争議は、1972年7月から12年にわたった。

東京地評・市毛良昌さんは「争議には普遍性と特殊性が在る」と言われ、音楽家ユニオン・佐藤一晴さんは「不屈で不退転の決意に徹する、争議体験は一生のもの」と語り、弁護士・小島成一先生は「歴史の事実を知り、要求の正当性と証拠を掘り起こすこと」と音楽家が理解できるように指導した。原理・原則のセオリー構築をめざしていた時、労働旬報社柳沢明朗社長から、ルポライターの今崎暁巳さんを紹介された。

今崎さんは、楽団員一人ひとりの生い立ち、生き方、に大いに興味を持たれたことを思い出す。労旬からは『友よ！未来をうたえー日本フィルハーモニー物語』（正・1974年、続・1977年）、『新世界へー日本フィルの旅立ち』（労働旬報社、1984年）を3冊出版した。

今崎さんは楽団員のおかれた苦悩、不安に着目し、ただ音楽しか知らない、大人子ども、の生き方、たたかい方をルポした。「傷ついた音楽家たちの人間回復への叫び、途方もないオーケストラ再建へのプロローグ・未来像を描いてくれた」今崎さんのルポと労旬のプロジェクトの皆さんの情熱は、楽団員の未知なる先行きに、オーケストラを守り、人間回復への使命感・連帯の絆の尊さを教えてくれた。2011年2月18日

（元日本フィルハーモニー交響楽団ファゴット奏者、同労働組合書記長）

松江の美少年 ● 山本元恵

「ア、松江の今井書店で、たびたび見かけた美少年は今崎さんだったのか」

それは、40年後、鳥根県人会で同席して会ったこと。1890年、来松したラフカディオ・ハーンが英語の教師をした松江中学の生徒であった今崎氏。少年時代のおもかげそのまま。話をしたこともないのに、旧知の友人のような、なつかしさ。

おだやかな表情、やさしい人柄につつまれた英知と情熱をペンにこめての生涯、同県人として喜び、誇りでもありました。

医療の進歩と充実のため、生涯たたかわれた父上と同じ政治革新の道をめざした今崎さん。中学の同窓生でもあった、「キッテンを偲ぶ会」(2010年3月)でお会いしたのが最後になるなど、はからずも並んで撮った写真が最後とは、無情きわまりなし。やさしさ、あたたかい雰囲気、さりげなく。心より御礼申し上げお別れとします。

(友人)

点から線へ、そして面へ ● 湯沢満男 倫

今崎暁巳さんと初めてお会いしたのは、今から35年前、東京都立農産高校に勤務していた時であった。もの静かな、そして穏やかな語り口調はその後のおつき合いの中でも

変わるものではなかった。5年間という歳月をかけて、生徒、卒業生、農産高校の教職員の授業（パン加工の授業、体育の授業、家庭科・保健の授業、農業実習その他）を見学して、丹念に一つひとつ取材してまわっていた。

取材された生徒や卒業生はいっぺんに今崎ファンになり、その後、個人的にも交流は続いていた。やがて農産高校の実践が『若者はいま歩みはじめる―高校生活への挑戦』（労働旬報社、1978年）という本にまとめられた。

マンガになり、テレビ映画にもなった。どんな小さなことでもきちんと取材し一つひとつのつながりを大切にし、面から立体へと広げていった。「農産高校の心をすべての学校に すべての若者に」を残して。合掌
（尚美学園大学非常勤講師）

丸紅との人権問題での出会い ● 吉田昂弘

今崎さんとの出会いは、私が丸紅との人権（隔離部屋、賃金格差、夫婦共働き）問題で、名古屋地裁にて提訴し、裁判中に東京への転勤命令が出されて、やむを得ず上京して、3年間、東京でたたかっている最中に、友人の紹介でお会いしたのが始まりでした。

裁判終了後に、「毒ガス」問題のルポの販売依頼を受けました。その時の書簡が手許にあります。日航の人権問題も読んだこともあります。

人間、労働者の実態に迫り、人間性の豊かな可能性と未来を豊かに切り拓く文筆業は、

労働者の真の解放への尊い礎となることでしよう。

(知人)

いつも感動を与える人でした●吉田博徳

今崎暁巳さんがご逝去されたことを知らされ驚きました。何も知らなかったものですが、今崎さんといつ頃からどんな経緯でつきあうようになったかは忘れてしまいました。長い間、電話や手紙などお互いに励ましあってきました。

思い出すことは、小平で毎年「平和コンサート」をやっていますが、そのなかで「象列車がやってきた」の構成劇を何回か行い、たびたび励ましてくれました。

その関係で象一頭を、クロアチアの子どもたちに贈る運動の宣伝やカンパなどに協力した。私が北区で朝鮮問題の講演をした時に、積極的に協力されて感想を述べられていたこと。

鳥生弁護士事務所の50周年記念行事に、積極的な役割を果たされたことなどです。

話はボソボソとして気弱そうな感じでしたが、文章はすばらしい感動をよぶようなものばかりでいつも感心させられていました。残念なことです、ご冥福を心から祈ります。

(友人)

今も生きる『ドキュメント日本航空』 ● 若月司郎

今崎先生の御逝去に哀心よりお悔み申し上げると共に、心よりの御冥福をお祈り致します。

1970年代後半と80年代初めの日航機連続事故は、大きな社会問題となり原因究明と再発防止の対策確立が求められた。1982年発行のこの著書は、日航内の乗員・客乗・整備職など現場で起きている問題を多面的な取材と多くの資料を駆使し、事故の背景に「利益第一・安全軽視」と「分裂差別の職場支配」の経営姿勢があると告発し、その変更を迫る異色のドキュメンタリーとなった。

当時の高木社長や労務当局は、この提案に耳を傾け日航労組との和解は成立させたが、抜本的経営政策を怠ったために遂に倒産した。再建途中の日航は、乗員・客乗職の不当解雇を強行し、再び労務政策が社会的に糾弾されているが、今こそ、生前の今崎先生の忠告を聞き入れ、国民の翼として再生することを望む。

(元日航労組委員長)

《返信ハガキをいただいた方々》

石井信喜／大浦ふみ子／太田洋一／岡田尚／岡本好廣／草薙秀一／小林佑／田島一
／田辺稔／仲築間卓蔵／藤岡貞彦／矢吹紀人／吉田幸子

サンキュー今崎さん、そしてグッドラック！ ●岡田 尚

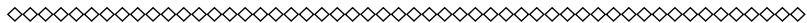
ハチマキを頭にキリリツとした青年労働者がコブシを挙げて演説している写真の表紙を今も鮮明に記憶している。『コブだらけの勝利』に接したのは、司法修習生として横浜にきた1972年。青法協の学習会で、この本の主人公である当時の総評全国一般神奈川地本油研工業分会の組合員を講師に呼んで読書会を開いたときであった。

司法試験に合格しただけで「どのような法律実務家になるのか」を真剣に模索していた私に、湘南の若い労働者をイキイキと描いたこの本は、その後の私の生き方を決める一つの大きな要因となりました。

弁護士となって、油研分会の差別撤廃闘争の代理人となり、本の主人公たちと深くつき合う（特によく飲んだ）ようになり、加えて『三菱帝国の神話』で描かれた全造船三菱重工支部の代理人となったこともあって、2年程前、今崎さんを囲んで油研分会、三菱横船分会の今は退職してそれなりの年齢になった組合員と、思い出話に花を咲かせながら、一杯やったことがせめてもの恩返しになったとすれば幸せである。

（弁護士）

本稿は、文集の印刷後に届きました。



原水爆禁止 1999 年世界大会に参加して、「民主文学」、p 148—151、
1999 年 11 月

【2000年代】

「ドキュメント日本航空」と「ともに生きる生活創造」の関係について、
「たたかいのルポルタージュ」、2000 年 3 月

原水爆禁止 2000 年世界大会に参加して、「民主文学」、p158-159、2000
年 10 月

人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (1)、「民主文学」、
p124—129、2004 年 3 月

人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (2)、「民主文学」、
p142—148、2004 年 4 月

人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (3)、「民主文学」、
p170—176、2004 年 5 月

人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (4)、「民主文学」、
p150—156、2004 年 6 月

人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (5)、「民主文学」、
p184—190、2004 年 7 月

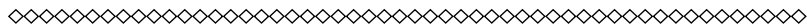
人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (6)、「民主文学」、
p170—176、2004 年 8 月

人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (7)、「民主文学」、
p166—172、2004 年 9 月

人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (8)、「民主文学」、
p144—150、2004 年 10 月

第 19 回下町人間庶民文化賞受賞・柳沢明朗さん、「天狗講と下町人間
のつどい」、下町人間の会、2004 年 10 月、NO .103

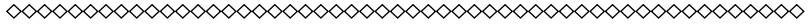
人間として生きる—戦争をやらない人間の記録 (9)、「民主文学」、



1184)、p42—48、1988年1月25日号
イタリア「第2のルネッサンス」の現場訪問記—2、時間を豊かに使う
生活、「労働法律旬報」(1185)、p53—58、1988年2月10日号
いま“豊かさ”とは—働き方・ライフサイクルを見直す・問直す 座談
会 今崎暁巳、芹沢憲一、富沢賢治、「労働法律旬報」(1187)、p4—
25、1988年3月10日号
イタリア「第2のルネッサンス」の現場訪問記—3—住民による自治・
文化・子育て—ポーロニャ市の経験から、「労働法律旬報」(1187)、
p40—45、1988年3月10日号
イタリア「第2のルネッサンス」の現場訪問記—4完—すべての人間
が自己表現できる社会、「労働法律旬報」(1189)、p17—23、1988年
4月10日号
ルポルタージュの今日的課題—取材現場に思うこと、「民主文学」、
p172—181、1988年10月

【1990年代】

60年安保闘争 30周年に想う、「民主文学」、p122—125、1990年6
月
女性パワーをさぐる（「女性の時代」と文学〈特集〉）、「民主文学」、
p114—121、1990年9月
イタリアにおける青少年の民主的育成現場にみる、講座「青年」3（世
界の青年はいま、p 209—224、清風堂出版部、1991年1月
雪の下で準備する春——明治乳業での26年間の労働者支配、「俺たち
は負けない—人間らしく生きるために」、p 12—20、明治乳業賃金・



ルポ 虹がたつとき（日本生活協同組合連合会、「生協運動」誌、1983年4月号～1984年3月号に連載された）

労働現場を生活の中心にすえることの大切さ、現実を見る眼の一面性や浅さ、「たたかいのルポルタージュ」、1983年5月

現場からのレポート—老人たちはいま…老人保健法実施後の現実（中曾根政治と福祉の貧困）、「文化評論」、p79—89、1983年12月

今日の現実と「民主文学」の役割 座談会 今崎 暁巳 [他]、「民主文学」、p104—118、1983年12月

文化と生活を創造する生協運動（生協はなぜ伸びつづけるか—現代研究会レポート〈特集〉）「賃金と社会保障」（888）、p21—26、1984年4月25日号

古さについて、現代の“人間らしさの創造にむかって、「たたかいのルポルタージュ」、1984年5月

唐津にて—子どもたちと教師と母親と（人間破壊に抗して—ルポルタージュ特集）、「民主文学」、p100—111、1984年6月

ルポルタージュの可能性—現代の矛盾をどうとらえるか（人間破壊に抗して—ルポルタージュ特集）座談会 及川 和男、稲沢 潤子、今崎 暁巳、「民主文学」、p116—135、1984年6月

“人間のくさり”で日本列島を一五・二七反トマホーク横須賀集会に参加して、民主文学、p136—141、1984年8月

女のいきがい—1—女が平和を語りだすとき—三九年の沈黙を破って、「賃金と社会保障」（900）、p4—13、1984年10月25日号

イタリアをたずねて—文化と協同のふるさと、「民主文学」、p152—164、1985年7月



市民とともに歩むオーケストラ—日本フィル九州演奏旅行同行記、「文化評論」、p135—147、1975年6月

映画「あしたの火花」の完成まで—造船大企業での職場支配とたたかう労働者とともに、「労働運動」、p181—183、1977年3月

大企業にみる労働者群像（現代における国民の自己形成＜特集＞）、「季刊科学と思想」、p77—87、1977年7月

人間らしくねばり強く賃金差別をなくすまで—川重の賃金差別を告発する原告団の一人 山野学さん（職場に生きる—ある労働者の人間記録）、「労働運動」、p213—224、1978年8月

新たなる時代を切り拓くために—たたかいのルポルタージュを目指す仲間たちへ、「たたかいのルポルタージュ」、1979年5月

それでも私は生きる—瀬戸際に立つ中高年労働者の生活と意見（特別ルポ）、「文化評論」、p108—119、1979年12月

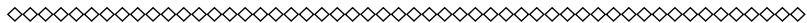
新たなる“人間的連帯”のかがやき（80年春闘読本）、「賃金と社会保障」(783)、p6—8、1979年12月10日号

【1980年代】

人間精神支配とのたたかい（80年代と私＜特集＞）、「民主文学」、p127—129、1980年1月

今、なぜ、たたかいのルポルタージュか、「たたかいのルポルタージュ」1980年3月

労働運動における人間性の復権（80年代労働運動と人間性）、座談会 石坂 悦男、元島 邦夫、今崎 暁巳、「賃金と社会保障」(834)、p6—35、1982年1月25日号



1987年7月)

『すてきな大学—キャンパスに協同を求めて』(UNICO BOOKS)(全国
大学生生活協同組合連合会、1989年1月)

『夢を、もっと大きな夢を一東都生協「産直物語」』(富民協会、1989
年10月)

□1990年代～2000年代

『人生つねに始発駅 人間金子満広』(東京八区日本共産党後援会・『人
間 金子満広』刊行委員会発行、今崎暁巳執筆、1990年)

『生活ごいっしょに一ふれあいからつながり むすびつきへ』(労働旬
報社、1990年3月)

『人生いつも素人—弁護士尾崎陞の挑戦』(シリーズ時代を創る人びと)
(あけび書房、1992年12月)

『いのちの証言—私は毒ガス弾を埋めました』(ふきのとう書房、2006
年6月)

『北の砦—ルポルタージュ鳥生忠佑と北法律』(日本評論社、2009年6
月)

テレビ、映画関係・脚本(シナリオ)

▽テレビ

判決(日本教育テレビ、現在の「テレビ朝日」)にシナリオ作家として
参加。

1962年(昭和37年)10月16日から1966年(昭和41年)8月10日に、
日本教育テレビ(NET、現・テレビ朝日)で放送されたテレビドラマ。



●今崎暁巳さんの主な単行本・映画・テレビの脚本

□ 1960年代末から70年代

『コブだらけの勝利——闘う青年労働者』(労働旬報社、1969年)

『良心の歴史をつくりたい』(新聞労連報知新聞労組・報知印刷労組・
報知大阪労組編、労働旬報社、今崎暁巳執筆協力、1970年6月)

『職場の青春——闘う信越放送労働者』(労働旬報社、1970年)

『めしと団結——たたかう関扇運輸労働者』(労働旬報社、1970年)

『いのちの讃歌』(労働旬報社、1970年12月)

『700人の記録——続・良心の歴史をつくりたい』(報知争議共闘会議編、
労働旬報社、今崎暁巳執筆協力、1971年5月)

『伊那谷は燃えて——辰野事件——その被告と家族』(労働旬報社、1972年、
辰野事件千代田守る会協力)

『千代田丸事件——ドキュメント』(現代史出版会、1974年)

『吼えろ青春——70年代に生きる青年労働者』(労働旬報社、1975年)

『友よ! 未来をうたえ——日本フィルハーモニー物語』(労働旬報社、
1975年)

『三菱帝国の神話——巨大独占企業の現場・労働者群』(労働旬報社、
1976年)

『友よ! 未来をうたえ(続)——日本フィルハーモニー物語』(労働旬報社、
1977年)

『新たな連帯を求めて——現実に迫るルポを』(学習の友社、1978年7月)

『若者はいま歩みはじめる——高校生活への挑戦』(労働旬報社、1978年)

今崎暁巳◇略歴

1929年7月9日、岸和田市生まれ。1954年早大文学部仏文専攻終了。ルポの質・テーマなどを決める一つの要素ともなる同大学院法学研究科労働法へ入学、1960年終了、ルポ作家。

東京憲法会議代表幹事、日本民主主義文学会幹事、下町人間・天狗講九条の会世話人、上野の森に「広島・長崎の火」を永遠に灯す会常任理事、子育て文化協同研究会全国世話人、東京革新懇世話人、現代ルポルタージュ研究会顧問等の役職を歴任。

2010年12月15日逝去。

今崎暁巳さんと私

2011年6月4日 初版発行

編 者 今崎暁巳さんを偲ぶ会

発行者 柳澤 明朗

発 行 下町人間の会

東京都台東区三ノ輪1-26-9

TEL 03-3876-3355

FAX 03-5824-0541

代 表 山口 義夫

印刷所 双信舎印刷

*非売品